

# 軍人奇譚

青年奮起

特 71

780

又召精華堂

發行



301363-001-1

特71-780

青年奮起軍人奇譚

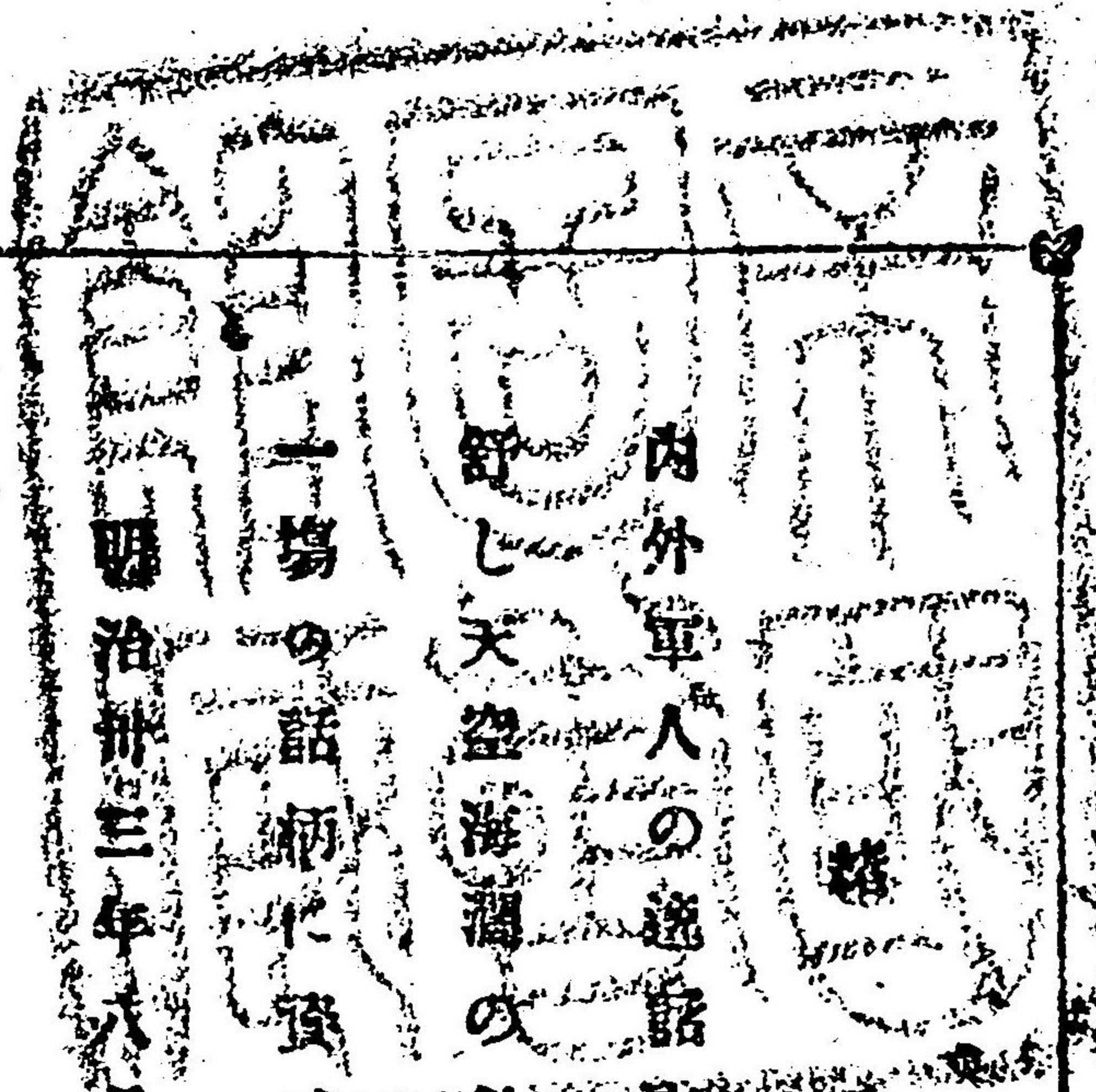
石川謙 / 著

M33.9

BFA-0001



特71  
780

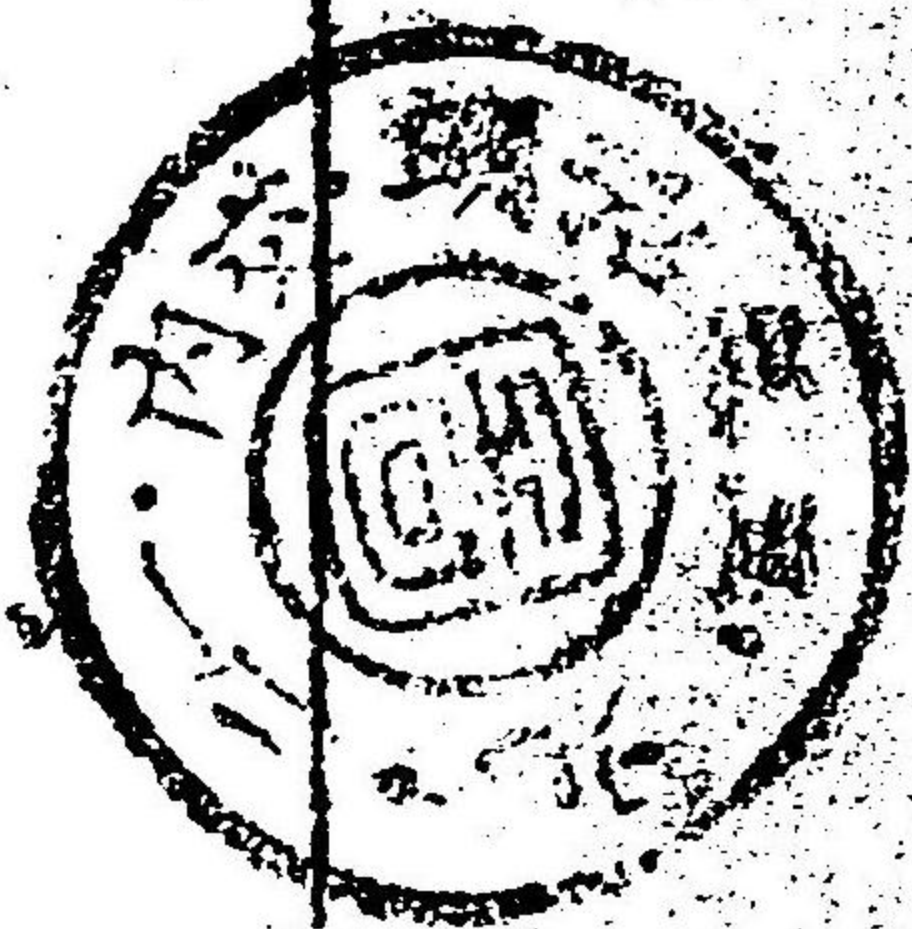


言

内外軍人の遠隔奇譚皆以て人の胸襟を發  
舒し天竺海瀾の氣象を養ふに足る豈管に  
るのみならんや

昭和三年六月

編者識



青年軍人奇譚目次

(1) 目次

---

○西郷隆盛の雄膽……………一

○黒田伯の磊落……………二

○四百メートル程の日本刀……………三

○逃げ上手は眞の戦さ上手……………四

○陣中百忍一酒……………五

○滋野中將右手を用ゐず……………六

○佐久間將軍の潔癖……………七

○佐藤將軍の雄猛……………八

○内田少佐の沈勇……………八

(2)

目

次

- 勇士となる工夫……………九
- 活人刀……………九
- 棚の牡丹餅……………一〇
- 尿を以て砲を洗ふ……………一一
- 故大寺將軍の清廉……………一一
- 薩摩の四豪傑……………一二
- 大島將軍の諧謔……………一三
- 一回も地に伏せず……………一四
- 短劔を長劔にして使ふ秘訣……………一四
- 露將スワロッパ……………一五
- 那破翁の一合士氣を奮はす……………一六

(3)

次

目

- 那破翁哨兵となる……………一七
- ゴルドン將軍の忠言……………一七
- テムール蟻の舉動を見て感奮す……………一九
- 創口内に秘書を匿す……………一九
- 有馬軍醫正の清韓比較……………二〇
- 石黒軍醫總監の贈物……………二七
- 一眼にて可なり……………二八
- 篠原の勇氣……………二八
- 金の逃る聲……………二九
- 山地將軍の快談……………二九
- 兵卒の指を截斷す……………三一

○ 兵士死を以て中隊長を救ふ……………三三二

○ 服を脱で火を防ぐ……………三三三

○ 高杉晋作の奇策……………三四

○ 赤澤一等卒の力量……………三六

○ 伊東將軍の膽勇……………三七

○ 故山田將軍の戦畧……………三七

○ 無形の寶……………三八

○ 福島少將の勇氣……………三九

○ 支那兵と雀の比較……………四〇

○ 六億圓にて旅順口を賣る……………四一

○ 横井軍曹の沈着……………四二

○ 千人の人柱……………四三

○ 大膽なる兵士……………四四

○ 綽々として餘裕あり……………四四

○ 迎も駄目だ……………四五

○ 赤身蒸氣の漏出を拒ぐ……………四六

○ ソラ御馳走するぞ……………四六

○ 都々逸……………四八

○ 二將軍の會談……………四六

○ 今鵬越……………五一

○ 清兵に對する軍法……………五一

○ 陣中の佳話……………五二

目

(7)

次

- 老西郷逸見十郎太を戒む……………五三
- 病者奮戦す……………五四
- 四將軍の評判……………五五
- 敵の屋瓦を撤す……………五六
- 銃を隊長に與ふ……………五七
- 道案内者とならん……………五八
- 呐喊聯隊……………六〇
- 伊東將軍の細心……………六〇
- 僕の功績ではない……………六一
- 辞々、言々涙……………六一
- 意氣堂々壯者を壓す……………六二

(6)

目

次

- 勇兵……………六二
- 鼩聲雷の如し……………六四
- 生きたる標的に向て射撃を演習せよ……………六五
- 寒氣學校……………六六
- 一足の靴を磨けば足……………六六
- 赤手の敵を撃つは心に層とせず……………六七
- 嗟、只汝を殺さんのみ……………六七
- 一身百餘人を殺す……………六八
- 死は恐るゝに足らず……………六九
- コンラッド少佐の剛勇……………六九
- 誰か知らし華盛頓なりしを……………七〇

目

次

(5)

○ 餘り満点過ぎはしないか……………七二

○ 二氏に優れるものあるを知る……………七四

○ 佐藤大佐學生の見舞を受く……………七六

○ 篠原の率直……………七八

○ 飢饉して一語を發する能はず……………七八

○ 池邊の慧眼……………八〇

○ 艦隊は丸で犬同様です……………八一

○ 米國新聞記者の肝膽を寒からしむ……………八一

○ 敬愛せる福原大佐……………八二

○ 桐野の友誼……………八三

○ 號令の聲雷の如し……………八四

目

次

(9)

○ 身を馬背に縛して號令を下す……………八四

○ 佐藤大佐の勇猛……………八五

○ 諸英雄の吟詠……………八六

○ ものは盡し……………九三

○ 箸を以て日本酒を挾む……………九六

○ 危険に兵を行る……………九六

○ 山田市之丞の機敏……………九七

○ 馬上常に團扇を携ふ……………九八

○ 一首の和歌敵の軍氣を沮喪せしむ……………九九

○ 市府の爲めに犠牲となる……………一〇一

○ 豈圖らん園丁は將軍なり……………一〇一

○ 死に臨んで武装に爲す……………一〇三

○ 交際場裏より拒絶せらる……………一〇四

○ ガイラルス將軍危難に伴ふ……………一〇五

○ 軍事狂……………一〇六

○ 英雄の機智……………一〇七

○ 勇壯なる少年兵……………一〇九

○ 其荷を爾に與へん……………一一〇

○ 諧謔暴民を鎮制す……………一一一

○ 花瓶を地に抛つ……………一一二

○ 提督たらんことを欲す……………一一三

○ 軍艦の操轉臂の指を使ふが如し……………一一四

○ 一足の草鞋萬戸侯に勝る……………一一五

○ 英國海軍士官の膽を奪ふ……………一一六

○ 桐野の壯圖……………一一七

○ 手足の如きは惜むに足らず……………一二七

○ 剛柔兼備の將軍……………一二八

○ 工兵戦闘力あり……………一二九

○ 六十六門の砲列……………一三〇

○ 豪膽なる中島騎兵中尉……………一三〇

○ 戦の爲めに不吉の名なり……………一三二

○ 敵地の嶮峻何ぞ恐るゝに足らん……………一三三

○ 堡壘闖入の卽智……………一三四



○ 二將校罪を争ふ……………一二五

○ 西郷隆武の先見……………一二五

○ 君はね世辞が上手になつた……………一二六

○ 玄武門の先登……………一二七

○ 黒木將軍の慈愛……………一二八

○ 豪傑組……………一二九

○ 戦地に在て尙ほ俳諧を弄す……………一三〇

○ 勇士の曲……………一三一

○ 大山大將の慈愛……………一三二

○ 山口將軍の剛膽……………一三三

○ 大膽不敵の兵士……………一三四

○ ヤンレー節……………一三五

○ 養氣都々逸……………一三六

○ 福原將軍の豪放……………一三七

○ 鼻唄をうたひつゝ突貫す……………一三八

○ 軍人中の奇傑……………一四〇

○ 銀色の腕環……………一四一

○ 壯烈剛勇なる一老將……………一四二

○ 老父怯兒に代つて軍に投ず……………一四三

○ アルマンゾル將軍の智謀……………一四四

○ 愛國心の結晶愛体……………一四五

○ 武勇を重んず……………一六六

- 人心の安まるが程度……………一六七
- 佩劍に刃を付せず……………一六七
- 那破翁の雄志……………一六八
- 首を垂れよ……………一六九
- 懷量訝かなる將軍……………一七〇
- 忠烈に抵抗し難し……………一七二
- 長谷川將軍の替歌……………一七三
- ソラ草鞋が出来た……………一七四
- 判じ物……………一七五
- 敵の腹中に在る糧を奪ふ……………一七六
- 勇壯なる養軍……………一七七

- 一劍を購んが爲めに家財を抛つ……………一七八
- 士官の快濶騎兵の天真爛熳……………一七九
- 船中の不文憲法……………一八〇
- 代議士冷かざる……………一八三
- 老西郷の遠謀……………一八三
- 日本人種なる墨國の名將……………一八四
- パルファートル軍の忠勇……………一八六
- 帝國の海軍々人なり……………一八七
- 自ら任ずること深し……………一八八
- 剛膽なる將軍……………一八九
- 山澤將軍の勇武……………一九〇

- 大山將軍の行爲……………一九三
- 戲言、戒言となる……………一九四
- 負傷、肺病を癒す……………一九五
- 沐浴して戦に臨む……………一九六
- 比志島將軍の勇敢……………一九七
- 三人の兵士従容として死に就く……………一九八
- アルベマールの剛毅……………二〇〇
- 伊太利の英傑……………二〇一
- 敵の船舶を奪ふ……………二〇二
- 軍人たるの大義を知る……………二〇三
- 獨逸皇帝と海軍水兵……………二〇四

特71  
780

雄

膽

(1)

青年軍人奇譚

碌々山人編

○西郷隆盛の雄膽

戊辰の役、西郷隆盛、勝安房の言を容れ江戸を攻むることを止めて  
 錦旗を品川に停む鳥取藩士之を以て西郷の專斷なりとし心竊に喜ば  
 ず七八名相謀り西郷を刺さんと欲し其旅館を訪ふ以爲らく彼れ必ず  
 護衛の士を置いて面晤するならんと既にして到たば西郷粗服の儘にて  
 單身出て會して曰く「吾等田舎漢にして他事を知らざれども戦争の

みは得意とする所なりしに何ぞ圖らん今度は江戸ツ子の勝に欺かれ  
たりと大笑す刺客其雄膽に呑まれて手を下さずして歸りしと云ふ

### ○黒田伯の磊落

黒田伯天性磊落にして其行爲往々人の意表に出ず一日外出中晝餐の  
時刻至る斯る時は蕎麥に限るとて蕎麥屋に馬車を横付にして自ら御  
者と馬丁を随へ悠々然として暖簾を潜り股引絆纏仲間割り込み自  
身は盛りが好きとて盛りを命じ御者と馬丁には天麩羅をかめ五目な  
ど成る可く上等の物を命じ三ツ金輪にて啜れば二人の者は主人の前  
とて恐入り兎角遠慮して音も静かに啜り二三杯も喰ふや喰はぬ中に  
モウ澤山で御座りますと只管恐入るに伯は之を見て大喝一聲馬鹿野

郎……と叱し其音は何だ男らしく盛んに啜れと自ら手を鳴らして幾  
杯も代りを命じければ其都度は二人は引變へく啜り込めば伯は欣  
然として色どけモツト啜れく

### ○三四百メートル程の日本刀

豫て擊劍に熟達せし陸軍中尉板橋直虎氏が日清戦争中、知人の許に  
送りし書信の一節に「彼れ豚兵に對し充分日本刀の切れ味を試みん  
ど勢ひ込んで出陣せしに、さていよく戦場に臨んで見れば案外な  
る仕合せにて彼の臆病なる豚兵どもは我が砲聲を聞くと等しく逃走  
するを常とするを以て之を銃撃するには易々なれども彼等に接近し  
て手練の腕前を揮ふことは思ひもよらず是れのみは實に遺憾の至り

にて此上は是非とも三四百メートル程の日本刀を造るに非れば所詮腕前を試めす能はず云々」と

○逃げ上手は眞の戦さ上手

山内陸軍大佐は胸襟洒落、小事に拘泥せず一日客あり大佐の門を叩き日清戦争を談じ清軍の怯懦にして遁逃に巧なるを笑ふ大佐微笑して曰くイヤ逃上手とて強ち怯懦なりと笑ふ可らず三十六計逃ぐるに若かずと何やらの兵書にもある如く逃上手は即ち眞の戦上手なり余も亦戊辰の役の如き白河口の戦に破れし時は一夜に六十餘里も逃げたり逃るのも中々六ヶ敷いと言ひ了つて啞然大笑す

○陣中百忍一酒

日清戦役の際二三の將校陣中徒然の餘り小倉百人一首に擬へ陣中百忍一酒と云ふを作る其意は露營の困苦、百たび之を忍び一たび酒を得るの謂なり左に其の數首を録す

渤海をわたるふなびとかちをたね

行衛もしらす逃ぐる敵かな

とくむれを前にでにけり我が兵は

もはやまけたと敵のいふ迄

金のためをしみ來りしいのちをば

永くもかなと逃てみるかな

わが方にひかりひらめく鋒さきに

あたり得がたく敵の散らん

あまつ風敵のかよひぢふきとぢよ

唐のもろふねながく洗めん

いにしへの支那の老爺のほら太鼓

けふこの頃に破れぬるかな

巡り逢て見しやそれとも分ぬ間に

雲をかすみと逃るてきかな

北京まで行くのしみちは遠けれど

夜ごとに通ふゆめのうき橋

○滋野中將右手を用ゐず

滋野中將平素家に在る時、必ず左手を用ふ。人あり其故を問ふ將軍、毅然として曰く余が右手は是れ、大元帥陛下の命を受け戰場に出でて叱咤暗啞三軍を指揮するの手なり平居豈に容易に之を使用すべけんやと

○佐久間將軍の潔癖

勇氣鬼を割くも甚だ容易なる佐久間將軍も不潔には尤も恐怖す將軍が厠に赴く時の必ず厠用として設けある足袋を穿き、厠を出れば如何にも恐しき物にでも觸るゝ如き有様にて足袋を脱ぐは實に奇種の潔癖なりと云ふ

○佐藤將軍の勇猛

勇猛を以て稱せらるゝ佐藤將軍の部下に石田少佐あり勇悍能く戦ふ一日將軍に言て曰く「私も戦争は好きでありますが貴君のやうに人の分までも引受けてやるほど好きではありません」と此一言能く將軍の勇猛なるを證するに足る

○内田少佐の沈勇

日清の戦に際し千代田艦長内田海軍少佐は黃海の戦ひ未だ始らざる時、某士官と碁を圍む一士官來り「烟一ツ見ゆ」と告ぐ艦長「諾」思ふに商船ならん」といひ神色自若たり次で亦來り報じて曰く「烟

二ツ見ゆ」と艦長曰く「諾、思ふに羸弱の敵ならん」と尙ほ碁を廢せず暫らくして又來り報じて曰く「烟見ゆ五ツ六ツ」と艦長始めて石を擲つて起て曰く「よし好敵手一擧之を粉碎せん」と戦鬪準備立どころに成る聞く者艦長の沈勇に驚く

○勇士なる工夫

或人某武官に勇士となるべき工夫を問ひければ武官曰く「イヤ別に六ヶ敷ことにはあらず只臆病の眞似をするのぢや眞の勇士は臆病者の如し血氣の勇にはやまらぬものなりと

○活人刀

李鴻章廣嶋に於て兇人に狙撃せらる佐藤軍醫總監之を治療す診察後

李氏の佐藤總監を引止め種々談話すること多し一日李氏總監の軍服を撫でつゝ其官等を問ひしに依り總監は將官の服なりと答ふ李氏は笑ふて更に「總監戦を知るか」と問へり總監之に答へて曰く「余は戦を學ばず帶ぶる所のものは是れ殺人刀にあらすして活人刀なり」と李氏大に感嘆せりと云ふ

○棚の牡丹餅

日清戦争の際某將軍より某將軍に送りたる手紙の端に「今日の如き有様にては棚の牡丹餅は悉く鼠に食はれんかと夫れのみ案じ居り候とありしと味ある言と謂ふべし

○尿を以て砲を洗ふ

摩天嶺の戦に我軍敵砲を奪ひ發射せんとするや砲筒黒烟に薰せられて用ゆべからず田代軍曹呼んで曰く誰か之に尿せざるかと一兵士刻下に尿して以て筒を洗ふ楊峰嶺の陷るるは此尿水與て力ありと云ふ

○故大寺將軍の清廉

故大寺少將性、粗豪、衣食住の事一に夫人に委して顧みず軍服の如きは専ら清潔に注意すと雖も其他は木綿服に木綿の兵兒帶にて食事の如きも決して嗜好を語らず只巻烟草は其最も嗜む所にして常にマニラの上等莨を燻し一ヶ月費す所十餘圓に上りしと、職に在る二十餘年常に清廉を守り人に接する淡泊にして城壁を設けず又内請の徒を惡む曾て師團の御用商人某其寓を訪ひ新渡の上等製のランブ一個



を出して之を贈る時に君友人と碁を圍む之を見て大喝して曰く貴様  
ランプを以て余を瞞せんとするか速に持ち歸れと某商人恐懼して去  
る

### ○薩摩の四豪勇

十年の役、桐野、篠原、逸見、村田を稱して賊の四豪勇と云ふ。桐野  
は瀟洒たる風采あり、彈丸雨下の際故らに身を背けて石に踞し談笑餘  
裕を示す其軍を率ゆるや眼を八方に派して少しの罅隙なし篠原は曾  
て一たびも軍令を下さず身士卒に先ちて進み自ら一銃を放ちて一步  
を進み士卒揮はずして之に隨ふ其彈丸の中に在る平然廣野を往くが  
如し戊辰の役上野廣小路より平押しに押したるも實に篠原なりし逸  
見の軍に臨む勇氣凜々馬に跨りて縱横馳突其の速きこと風の如し揮

ふ所の太刀は長さ五尺に餘れり村田の兵を行る雄邁剛毅其の動かざ  
ること山の如く軍敗るれば陣中に睡臥す故に人村田の睡れるを見れ  
ば其の敗軍なるを知る

### ○大島將軍の諧諺

海城逆撃の際大島旅團長は歡喜山上に在りて諸隊を指揮せり而して  
各將校に對して談話する事一々諧諺に出で數萬の敵を目前に控ゆる  
ものとは思はれざりき初め敵の進軍し來りて開展せし時の狀形を見  
ては「ハア敵は富士の卷狩を遣るナ」「皆さん此様子は神葬祭で  
御座る」などの調子にして敵の發砲するに當りては「ヤア能い音が  
する、こんな丸に中つて死んでは惜いナ」敵は三國誌を讀んで來  
て「コッチを脅かす積りだらう」など一言一句諧諺ならざるはなかり

○一回も地に伏せず

虎山攻撃の際尤も勇名を博したるは長田大尉なり當時敵は江岸の要地に據りて防禦の戦闘味爽より晡時に達す大尉敵と戦ふこと十數合常に先頭に立ちて一回も地に伏せず故を以て敵彈屢々中るも少しも身体を傷けず戦後背囊を検すれば囊の胸部に接する所一丸命中して囊裡の鯉節と乾飯とを貫き而して燒塩の罐詰に至て止り居たりと

○短劍を長劍にして使ふ秘訣

亞拉非亞國王ダマスカンにて鍛へたる劍を侍臣等に示し如何に立派なる劍にあらずやと云へば侍臣は實に稀代の寶劍に候たゞ今少し長からんには更に物の用にも立つべしと云ふ此時傍に侍したる王子は

カラ／＼と笑ひて汝等の物語こそ心得ね軍人の持てる劍に短からん憂あるべからず开は二歩も三歩も前に進みたらんには如何なる劍にても敵を突くに何の仔細かある兎角に人は膽玉が第一なり是さへしつかりとしたれば軍器の不足は云ふにも足らぬことなりと雄辯滔々と述べければ侍臣等王子の膽力に感じたりといふ

○露將スアロツフ

露國のスワロツフ將軍曾てアルプス山を越むし時、其兵嶮峻に難みて困憊甚しく隊伍亂れて號令行はれず平生の訓練此に至つて幾んど其用を爲さずスワロツフ大に怒ると雖も如何ともすべからず乃ち一土窖を穿たしめ自ら之に投じ衆に告げて曰く「汝等宜しく土を以て余を覆ふべし余已に汝等に侮蔑せられて號令更に行はれず寧ろ土中

に埋死して深辱を脱せんことを欲す」と爲めに兵士足下に拜伏して  
 緩怠の罪を謝し奮勵努力以て大將の爲めに死せんことを誓へりと云  
 ふ

### ○那破翁の一令士氣を奮はす

第一世那破翁、伊太利を征せんとし天下最大のアルプス山脈を越ん  
 とす已にして荒漠の谿谷と呼ばれたる最險の處に至りしときは兵士  
 皆疲勢して進む能はず然るに此際一たび那破翁の至るを見、一たび  
 其聲を聞くや兵士忽ち元氣を増し復た進行すること常の如くなりし  
 が更に一層の難路に支へられ兵士皆な踟躕す此時那破翁命じて鼙鼓  
 を鳴らし喇叭を吹かしめ進撃の號令を下せしに士氣忽ち奮ひて進行  
 すること恰も平坦なを途上を往くが如くなりし

### ○那破翁哨兵となる

一千七百九十七年第一世那破翁マンチエア城を圍み遂に之を陥れた  
 り此役中那破翁は一哨兵の疲勞して眠れるを見、自ら其銃を把りて  
 之を肩にし護ること凡そ半時間許、既にして兵卒眠り覺め此体を見  
 て大に驚き恐怖戰慄に堪へかね那破翁の膝下に平伏叩頭す然るに那  
 破翁は怒れる色なく徐に諭して曰く

吾が親愛なる友よ汝の銃は吾能く之を保存せり實に汝は長途を馳  
 せ且つ能く苦戰の勞に服せり汝の睡眠するも亦宜ならず然れども  
 目下瞬間の怠慢は全軍の勝敗に關する所なり吾れ今日幸に醒覺せ  
 しを以て聊か汝に代りて職を盡せり汝宜しく將來を戒慎せよ

### ○ゴルドン將軍の忠言

往年露清葛藤の際ゴルドン將軍李鴻章に忠告して曰く戦ふ勿れ戦ふ勿れとは即ち大戦争を仕掛る勿れとの義なり之を爲さば足下は必ず敗北すべし宜しく壯兵隊を出し彼處此處に出没せしめて敵を惱ますの策を執り堡壘の後。成る可く遠距離の處に居る可し蓋し足下の兵は胸壁の後に於ては善く戦ふと雖も奮進戦闘するの勇氣なし因循姑息と曖昧糶糊とは常に足下の兵策たるべし足下は日本よりも遙に長き間。交戦に用意したる姿勢を繼續するに堪ゆる者なりと雖も決戦の機會を敵に與ふる勿れ乃ち日本を朝鮮以内の戦闘に繋ぎ止め足下の兵は退軍の諸要處を貫きて本國支那へ達する聯絡を保持し足下の海軍は何時にても機會の乗ず可きわらば攻撃し得る準備を爲し置く可しと雖も決して大交戦に力を費す勿れ以上陳述したる兵策を以て

すれば足下は敵を倦み疲からして終に勝つべし足下は巧に人を操る豆藏とはなるべしと雖も勇敢なる攻撃者となるは分外なりと

○テムール蟻の舉動を見て感奮す

韃靼のテムールは一時英名を轟かしたる人なり或る時の戦に敗れて獨り身を脱し草舎の中に潜伏す偶々壁下に蟻あり麥粒を壁上に運ばんとするに壁半にして地に墜ること六十九次。然れども更に屈せず遂に七十二次にして壁上に達することを得たりテムール王は之を熟視せしが忽ち感奮て謂へらく一昆蟲尙は此の如し况や人に於てをやと再び志氣を振ひ出で、敗兵を收め遂に敵兵を破り其國を興せしと云ふ

○創口内に秘書を匿す

亞米利加南北戦争の際英國の騎兵第十七聯隊の伍長ヲラベリーは將官の命に従ひ秘書を帯びたる使者と共に司令官ロールドローンの陣營に至るの途、敵兵の攻撃に逢ふて使者と共に重傷を被むりしが使者死するに及んで自ら其秘書を取り尙ほ馬に騎して進みけるに出血甚しき爲め氣力竭きて仆れたり然れど身俘虜となりて書中の機密を洩さんことを恐れ創口を穿ちて其秘書を匿し傷勢之が爲めに危篤なるに至れり然るに次日英軍此處に來りヲラベリーの倒れたるを發見せしが幸にして未だ死に至らざりしかば秘書の所在を知ることを得たりといふ

○有馬軍醫正の清韓比較

有馬軍醫正は北清一部と朝鮮とに於て目に觸るものを左の如く比較

せり

支那人の貧富に大差あるは驚くべし

朝鮮人貴賤の別は目に立たず

支那人は賄賂の下に生活し

朝鮮人は壓制の下に生活す

支那人は身を思ふを知つて國を愛するを知らず

朝鮮人には少しく國民的の氣象あり

支那人は舊習を守り

朝鮮人は新奇を好む

支那人は金錢の爲めに恥を知らず

朝鮮人は少しく恥る色あり

支那人は使役するに易く

朝鮮人は困難なり

支那人は身を惜まず働く

朝鮮人は惰け者多し

支那人は食を減じても金を蓄め

朝鮮人は其日暮しの者多し

支那人は四十以上ならざれば鬻を生さず

朝鮮人は顔に剃刀をあてず

支那人には痘痕少なく

朝鮮人に之多し

那人には齲齒なるもの多く

朝鮮人の齒は健全にして清し

支那人は肩に荷を擔ひ

朝鮮人は脊に負ふ

支那人は椅子に依り

朝鮮人は坐して仕事す

支那人は蹴ることに巧にして多く罽丸を狙ひ

朝鮮人は石を擲る巧にして主に頭部を狙ふ

支那人は鼎を上ることを誇り

朝鮮人は弓を射ることを自慢す

支那人は妻なき者として別に卑しむの風なく

朝鮮人はチヨンガー(無妻者)を一人前のものならずとて之を卑む

支那婦人出れば多く夫の背を頼みとし

朝鮮婦人は出るに多く白衣を被る

支那婦人は物を手に持つ

朝鮮婦人は頭上に置く

支那人は目出度事には必ず赤き紙を用ゐ

朝鮮人は多く白紙を用ゆ

支那人は大きな赤き名刺を用ゐ

朝鮮人は當時我國の風を習ふもの多し

支那には官醫儒醫傳醫の別あり

朝鮮には京城の外醫師の名あるものなし

支那人には無筆の者割合に多く

朝鮮人には文字を解する者多し

支那人は字を書くに遅く

朝鮮人は早し

支那人には珠算に巧みなるもの多く

朝鮮人には目算を爲すもの多し

支那人は葬儀に泣き婆を雇ひ

朝鮮人は葬式躍手を頼む

支那人は喪中は白色の服装を爲し

朝鮮人は馬鹿に大きな笠を被ふる

支那人には御幣擔ぎ多く

朝鮮人は無頓着なり

支那人には八卦巫呪を爲す者多く

朝鮮人には之を爲すもの少なし

支那には衛生の文字あり

朝鮮人は之を解せず

支那人は不潔を厭はず

朝鮮人は不淨の何たるを知らず

支那人は人の前にて放尿するを恥る色あり

朝鮮人は客の前にて平氣なり

支那には洗湯理髮屋あり

朝鮮町には更になし

支那人は十日廿日目一度入浴を爲す

○石黒軍醫總監の贈物

朝鮮人は時々手足を洗ふのみ

石黒軍醫總監戰地より歸るや廣島の岡辯護士直に其旅館を訪ひ餽る

に蒲鉾と鰯とを以てす曰く李鴻章(蒲鉾)と袁世凱(鰯)を今夕市頭に

生捕れり總監意に任して御處分下されよといひければ總盛受けて莞

爾として曰く愉快なり直に軍法を以て處斷すべしと起て小刀を取り

兩斷し居合せたる、同僚と共に大白は浮べて一座哄然たり岡氏將に

辞し去らんとす總監乃ち行李を探り紙に包みたる一塊を出して岡氏

に援く曰く是れ眞の持合なり聊か僕が意を致さんと岡氏推載いて家

に歸り總監洒落るナと云ひつゝ紙を開きて之を檢すれば此は抑も如

何に張紙にて製したる一個の首桶に支那兵の生首を入れたるシヤボ



ンなりければ岡氏横手を拍て善い哉此生首やと頻りと打興じたりとは眞に是れ一場の好贈物なり

### ○一眼にて可なり

前原一誠兵を萩に起すや當時廣島鎮臺にありし川村少佐一大隊を率ゐる藝防の國境を経て山口縣に入る少佐偶々一眼を病む或人之を憂ふ少佐曰く「前原を伐つは一眼にて可なり」と意氣泰然たりしといふ

### ○篠原の勇氣

王政維新の際、幕府の彰義隊が東叡山に據るや官軍之を攻撃に際し黒門口に向ひし篠原國幹なり當時國幹勇を奮ふて突進し常に自ら兵士に先んず部下の士卒等其敵刃に斃れんことを恐れ之を擁して門外に引出す國幹肯かすして直に進む兵卒等之を引出すこと前後七回

に及びしといふ國幹將校の身を以て兵士に先んずること常に此の如し故に部下の士皆な奮て之が爲めに死せんことを願はざる者なかりしと云ふ

### ○金の逃る聲

維新の際大村兵部大輔伏見の營所に在るや書生を集めて兵書を講す近傍に青樓あり絃歌常に聞ゆ故に書生時々登樓して講筵を欠席することあり大村大輔之を喜びず一日講筵を開く時に絃歌常の如く起る大輔書生に問ふて曰く彼は何の聲なるぞ衆生曰く三絃太鼓の音なりと大輔曰く否な決して然らず彼は金の逃ぐる聲なりと衆大に悟り翻然登樓を止む

### ○山地將軍の快談

一日山地將軍。川上中將に向て曰く君は日々帷幕ゐぼくに參し晝夜齟齬あぐさするゝが僕甚だ氣の毒に思へり僕の境界を見玉へ陛下より出戰の御命令あれば火の中水の底を撰ます敵と死生を争ひ之に反し還軍の命下れば師を帥ひきゐて還る其の仕中の簡便かんべんなる其の心の氣樂きらくなる迎も外人の推想すゐさうし及ぶ所にあらず僕は實に善き株かぶの株主となり此株と容易に離はなされぬ僕常に部下ぶかの者に云ふ軍は最初が大事だ最初に貧乏ひんぱう圖ちうを引けば始終貧乏が付て廻まはるぞと今回第一師團は最初から終りまで最上等の棧敷せきしきを占めた第一軍を見られよ金を鑠しやくす驕陽きやうと戦ひ脛すねを没する積雪せきせうを踏ふみ分け人間のあらゆる艱苦かんくを嘗なためり第一師團は然らず最も遅く出立して最も早く歸朝きてうの運はこびに遇あひ今は己に過半くわはん東京に着したり其の戦争の地は金州、旅順、蓋平、田庄臺苦戰は一軍の如くな

らずして勝利は第一に人に稱揚しょうやうさる人間の運も開くれば一から十まで續くものな時に只一ツ氣掛りの事あり檢疫の手續が手間取る爲め島まで歸りたる第一師團の兵も今に東京に来るを得ざること是なり彼等は定めて一日千秋せんしゅうの思にて東京に歸るを思ふならん云々

### ○兵卒の指を截斷す

別府晋介は風采清秀ふうさいせいしゅう、意氣いぎの激勵げきれいなること秋霜しゅうさうの如し西南の役西郷隆盛に従ふて起つ陣中に於て一兵卒の指に銀環を貫くあり別府之を詰問けつもんす兵卒顔かほを赦くして答へず傍人低聲戯れて曰く是れ情婦の贈る處ならざるかと別府忽ち其の兵卒の指を掴み小刀を以て之を截斷し聲を勵して叱して曰く柔弱此の如きは我軍隊の氣勢に關すと傍人皆な戰慄せんりつす

## ○兵士死を以て中隊長を救ふ

旅順口進撃の際、其先鋒たりし搜索騎兵は敵の歩騎二千三百人と双  
 臺溝附近に於て衝突せり敵は雲霞の如き大軍味方は非常の小勢なれ  
 ば衆寡敵すべからざるは明かなれども我將士の勇猛なる敢て之を物  
 ともせず撃ての號令と諸共に吶喊の聲激しく敵を目がけて斬り入れ  
 り時に中隊長淺川大尉は右を拂ひ左に當り獅子奮進の勢ひにて敵を  
 蹴散し惱ます間に流丸右腕を傷け之と同時に馬も傷き大尉は墜と落  
 馬せり大尉の命は風前の燈火アハヤ殘忍酷薄なる蠻兵の毒手に斃れ  
 んとする折柄騎兵一等卒橋本敵に腹部を打貫れて重傷を負ひつゝ退  
 却しけるが大尉が落馬するを見るや直ちに馬を返して大尉を助け自  
 ら馬を下りて大尉に向ひ中隊長様には之にれ乗り下されといふ聲も

絶々なれば大尉も已に右腕を傷ける身なれば劔を杖に僅に馬に跨り  
 しが手綱を操ること自由ならず橋本斯くと見るより自己の重傷を打  
 忘れ自ら轡を執り馬と共に駈出し漸く近傍の高地に達して危きを免  
 れたり然るに橋本は馬と共に疾走せし爲め重傷は一層痛みを覺ゆ大  
 尉の安全なるを見て先づ是にて安心せりと叶びしが其儘絶息せり忠  
 勇剛膽の將士多しと雖も死を以て其將を救ふ此橋本の如き幾人かあ  
 る

## ○服を脱で火を防ぐ

黄海の激戦中、敵の砲彈西京丸の下甲板にて破裂し火薬庫に火の移  
 らんとせし時、同庫の看守一等兵曹と四等卒は今や死地に陥り他の  
 勸告をも聞かず堅く倉庫を守り居りしが硝烟夥多しく隙間より漏れ

來りてアワヤ火の移らんとするを見るや二兵士は共に其衣服を脱ぎ  
 烟の來る穴を塞ぎて終に同艦を救ひたりと

### ○高杉晋作の奇策

幕府征長の役、奇兵隊長高杉晋作馬關の青樓に於て薩の將西郷吉之  
 助と密會し事を謀る而して其漏んことを恐る因て他の諸士をして隣  
 室に酒宴を開き飽くまで醉歌舞踊し杯盤狼籍、耳をも聳するばかり  
 に亂舞せしめ恙かなく細大の事を密議し了りぬ」  
 晋作慨然として勤士論を唱へ俗論黨に對抗するや晋作を獲て甘心せ  
 んとし之を偵知すること急なり晋作暫く其難を避けんとて手拭を以  
 て顔を掩ひ刀の柄に油徳利を掛け其狀宛も田舎の神官が物を城下に  
 買ひ求めて歸村するものゝ如し、遂に山口の市街を出づ既にして一

村驛に至るや儼然として實名を告げ君公の急使を奉ずと詐り告げて  
 昇夫數名を雇ひ急行して馬關を脱し終に筑前に潜む」

慶應二年幕府の兵大舉して長藩を攻む其兵頗る多く海陸並び進み室  
 津及び大島を砲撃す是の時に當り晋作馬關の軍を監す或る夜潜かに  
 軍艦に乗り大島より東を繞りて敵艦の中央に突出し俄に之を砲撃す  
 敵兵驚愕して爲す所を知らず晋作此機に乗じ大に汽煙を激し疾馳し  
 て圍を突き豊後洋に抵る幕艦之を逐んと欲す既にして以爲らく此れ  
 或は薩兵來りて長を援け我を誘ふならんと乃ち逐ふことを止む是を  
 以て室津以西の海濱終に兵禍を免るゝを得たり晋作の兵を用ゆる其  
 勇敢機敏大率此の如し

元治元年英、佛、米、蘭の四國、軍艦十餘艘を率ゐて馬關を攻撃す

勢甚だ猖獗にして民心恟々たり藩主毛利侯大に之を憂ひ晋作の用ゆべきを知り之を獄裏より赦して馬關に赴き援けしむ是に於て晋作綺羅の服を纏ひ錦繡の袴を着け蛇の目の傘を携へ高履を穿ち藝妓數名を拉し伊勢謠曲を高唱し舞蹈して陣營に入る見る者呆然たるも士氣亦た大に振ひしと云ふ

### ○赤澤一等卒の力量

日清の戦役中和に於て名譽の戦死を遂げし騎兵一等卒赤澤才八氏は膂力衆に勝れ容貌偉偉軀幹長大且つ乗馬術に長ず一日我力量を試みんとて乗馬の四足を捉へ何の苦もなく之を差揚げたるが尙ほ飽き足らずとなし馬匹の下腹へ双肩を差入れ一ト揺り揺りて引脊負ひたるまゝ疾驅すること十數間、再び元の處へ歸へり徐かに之を地上に卸し

て自若たり傍人其体を見て驚嘆し一時傳へて隊中の談柄となりしほど

### ○伊東將軍の膽勇

日清海戦の際、聯合艦隊司令官伊東將軍松島艦の指揮臺に上り双眼鏡を執て戦況を監視す會々敵艦定遠より放らし一巨彈指揮臺下に落つ將軍笑ふて曰く「エライことを遣りおツた」傍らの士官曰く「何です」將軍益々笑ふて曰く「馬鹿の大砲でも彈丸を避けられぬ」と將校皆な其膽勇に驚く

### ○故山田將軍の戦畧

故山田陸軍中將(顯義)頗る兵學に長ず箱館の役若くは十年の亂其役赴にく毎に奇計を出し奇功を博すること多し蓋し韜畧の深遠なるに

因る十年の役、官軍將に人吉を攻めんとするや山田將軍諸將に謂て曰く古今兵に將たる者唯夫れ進取の策を劃すること密にして退守の法を究むること疎なり故に一旦退くことあらば百戦して畧取せし地をも一敗の下に失ふことあり今や人吉の敵の根據にして彼れ堅く之を死守す我兵進みて迫らば彼も亦た畢生の力戦をなして之に應ん然るときは其變豫め測る可らず先づ宜しく退軍の計劃を明にし悔を他日に遺すべからずとて一旦敗を取りしとき用の意を授け吾が本據とする所を紊すことなからしむ蓋し山田將軍の兵を行るや多く人を殺さずして勝を占むるは此周到なる用意あるに因ると云ふ

### ○無形の寶

故大寺將軍會て獨逸に在る日老西郷の令息寅太郎氏彼の地に留學中

なるを以て常に通辯の勞を執れり一日獨逸の將校ハ將軍に問ふて曰く「足下は何を見る爲めに來りしか」と將軍直に西郷氏の通譯を以て「無形の寶を見に來れり」と答へしに獨逸の將校一言もなかりしと云ふ

### ○福嶋少將の勇氣

平壤の役、彈丸雨注の間に立て神色自若能く參謀の任務を盡せしは福嶋少將なり此激戰中銃丸少將が愛馬の左耳を穿ち少將の腹部を掠めて飛ぶ爲に左の隱囊裂け皮肉破れて出血せり軍醫直に之を治療せんとせしに少將首を左右に振り「ナニこれしきの事に醫者なんぞが入るものか」と自ら繃帶を施し再び馬に鞭つて前進せり平壤陷落の後、人の傷所を問ふものあるに會せば少將莞爾として笑て曰く

「モ一癒なほつた〜」と其勇氣ゆうき當る可らず

### ○支那兵と雀の比較

陸軍中尉松前政儀氏出軍の命を受けるや大に喜び其友人に語て曰く軍人が君國くんこくの爲めに戦死するは固もとより當然の事なれど唯彼の豚兵征伐を爲すに至つてはホンの實地演習じつちえんしゅうに少し毛の生ぬた位のものにて到底討死ていうちじにするやうの事はあらざるべし殊に冬季に至らば或は暫時一處に滞陣するやうなる事もあるべきに依り余は其際遊山旁飯の菜に取る積りにて雀網を用意し出發する積りなりと語り居りしが其後中尉は金州の冬營地より一書を送りて豫て出發の際御話し申せし如く冬營中の退屈たいくつ凌しのぎに日本より携帯せし霞網を張つて雀狩をなせしが支那兵よりは雀の方が大分利口など見ぬて網に罹りしは未だ僅々五

羽に過ぎず是では飯の菜にも成りさうもなく大に閉口へいこうし居れり支那兵を狩るより雀を狩る方が骨が折れるとは近來きんらいの一奇談きだんに候云々とありしと云ふ

### ○六億圓にて順旅口を賣る

一日二三の將校某所に會談す某大尉曰く金州冬營の將士薪炭しんたんに乏しく衣食亦た十分なりといふ可らず進軍の際若しくは戰鬥中せんとうちゆうに於ては病者を出すこと殆んど無しとするも久しく一の同場所に屯營とんえいするに當ては如何に勇壯ゆうさうなる兵士も志氣阻喪しきそそし病者を出すに至るを免れず故に余は冬營將士の爲めに大に憂うれふる處なくんばあらず云々との某少佐之を聞くや忽ち叫んで曰く善し予に一策あり乞ふ君の爲めに語らん聞く處によれば旅順陷落りょんけんらくの際或外人は我が將校に向て「若し旅

順口を御賣に成るなら六億圓にて御世話致さん」と述べしと果して然らば我國は今直ちに六億圓にて旅順口を清國に賣り然る後第二軍をして再び之を略取せしめ更に六億圓にて賣却し又々之を攻め取り又々之を賣り斯の如くすること數十回に及ばゞ我國庫は幾兆幾極の大金を收むるを得て而して第二軍の將士は冬營の艱苦を免れ士氣益々壯烈なるを得んと聽く者皆な哄然たり

### ○横井軍曹の沈着

旅順附近に於て兩軍鏖戦の最中砲兵の將校敵壘の距離を知らんと欲し測量を一等軍曹横井五六郎氏に命ず横井軍曹直ちに占領の第一目的地たる椅子山砲臺の方に向ひ徐ろに懷中時計を取り出し敵壘を望み壘上より前後相次ぎ我軍に向つて轟發する砲彈我頭上に飛び來り

爆然として破裂する其瞬間に至るまで今の砲彈は幾秒、今度のは何秒と泰然自若として一々計算し、やがて一表を製出し敵壘までの距離は幾千幾百幾メートル此の通りで御座いますと言葉も靜かに上長官に其表を添へて復申せし言語舉動は發火演習の際にだも見る可らざる程の沈着嚴整なりしと云ふ

### ○千人の人柱

桂將軍或人に語て曰く今や我第一軍は着々歩武を進め來り山海關を蹂躪し北京に乗り込む期して待つ可きなり彼れ清兵如何に防禦するも如何に苦心するも其畫策する所極めて頓馬なる所あり假令十萬の兵を以て來るも千人の人柱さへ築かば北京を踏み破る指顧の間に在りと將軍の勇壯想見すべし



○大膽なる兵士

長虎臺附近の戦闘中我軍二名の兵士は彈丸雨注の下に平然として一は銃を肩にして立ち一は小脇に抱へて踞し何をか用を便するものゝ如し此時馬を縦横に飛ばして令を傳へ居たる弘岡副官此有様を見るや駈け來て「お前方は如何したのか」と問ひしに二兵士ハ「はい私と大便」ハイ私は小便」と答へぬ副官微笑しつゝ、「好しく充分にやれ感心だ」と言ひ終つて又も馬を飛ばして硝烟の中に進み行きけり偕て此勇士は誰ぞ立つ立は嘩道軍曹、踞する者は山本一等卒なり

○綽々として餘裕あり

金州城を陥れし次の夜非番の一兵卒敵の遺せる櫛を見出して同僚のものに示しつ躑高らかに吾こそ「朧月夜」を得たれと叫ぶ一同其意を

解し兼ねて何ぢや〜と詰るとき巡視の爲め此に來合したる一士官それを聞きて此好味を遣り居るなど後戻し何故かと問へば古歌に  
照りもせず陰りも果てぬ春の夜に

朧月夜にしくものぞなき

と答へて立ち出ぬ蓋し此兵士はしくものを敷物に捏り、それより歌を思ひ付きて朧月夜とはしたるならん左りとは風流の兵士かな誰れか兵士をして斯くも綽々として餘裕あらしむるものぞ只だ一死報國の精神

○迎も駄目だ

岫巖柘木城間に於ける戦闘中粥川副官、内藤少佐の命を齎して各隊に至らんとす其間必ず谷を越ゆる可らず馬を下んか或は機を失ふ

の虞あり是に於て副官大喝一番ヒラリと馬を躍らせて向ふへ飛び越したり爲めに使命を全うするを得たりと戦ひ終りて人あり副官に向ひ今一度飛び越へて見玉へといひしに副官は呵々と笑ひ今では迎も駄目だ

### ○赤身蒸気の漏出を拒く

海洋島の海戦中敵弾來つて赤城艦の蒸氣管を毀損し蒸氣洩れ速力減却し危機一髪、忽ち一火夫あり其上衣を脱ぎて瀆管の傷所に當れども蒸氣の壓力烈しくして其効なかりしにぞ火夫は更に赤身上衣の上より瀆管を抱き辛ふじて其漏洩を拒ぎたり斯る應急の修理法に依て好結果を呈したるは稀世の功績と謂ふ可し

### ○ソラ御馳走するぞ

故榊原少佐、少尉たりし時同僚前野少尉と意氣投合し水魚も雷ならざる間柄なりしが二人とも身少尉にして俸給裕かならざれば部下の兵士を犒ふにも常に意の如くならさること多かりしが時恰も正月に際しければ部下の兵士を招きて饗應せんとは思ひしがど囊中無一物にして如何とも銓術なく何か好案もがなと前野少尉と額を鳩めて軍略を講じ終に名策をば案出せり斯くて部下の兵士には午後より遊びに來れと言ひ置き少佐は前野少尉と共に早朝より上官の宅を回禮せしに何れも美酒佳肴を出して饗應しければ二人は下物に箸を着けず之を手拭又は手巾に包みて辞し去り斯くて數十軒を回禮せしときは早や持ち切れぬ程となれり二人計畧圖に當れりとして打笑ひつゝ急ぎ我家に歸れば兵士は早や來りて待ち居たり。そこで二人はソラ御馳

走するぞと包みを開けば蒲鉾、王子焼扱ての魚肉鳥肉其中に雑居せり兵士等何れも打喜びて牛飲馬食し計らず好き正月を迎へたりとて倅然として歸りしが小際長殿には斯くまで我々を愛せらるゝかどて是より後は一層其徳に懷きたりといふ

○都々逸

日清戦争の際、廣島に在りて未だ征清の途に就かざる某大尉、一日或人と會飲したる時、節を撃て出軍の遅さを嘆じ歌ふて曰く

戦にやゆかれず女にや振られ

ほんに廣島あきの國

○二將軍の會談

伊東樺山の二將軍廣島の春和園に會見す先づ寒暄の挨拶終りて伊東

「相變らず御繁忙なるべし」との伊東將軍の挨拶に答へて樺山「ナニ本營の方はそれほどの事もござはん」伊東「長谷川兵站監の話しに據れば戦のあつときや忙がしふはねどんから、戦争がねときやあつちこつちから種々なもんぬ送れちゆ、ゆつくとつで（言ひ來るので）忙がしゆす溜らんそうじやなあ」樺山「ハア陸軍の方じや、いつも爾ういつちよるいけんな戦争は海軍にかざるじやごわはんか陸軍の方は戦争よか兵種の運搬が溜らん」伊東「あつて（左様）そこは海軍の方がよか戦争があつても別に兵糧がドウコウちゆ云ふじやなし三度々々當り前に食ちぬ、ねつときも休む時も少しも變らんから戦争の時や却て御馳走が廻る位じやつで」樺山「いぞかん（然し）陸軍の方は戦争に掛けらや負けちぬん負けてもいつで（一度に）皆んな死ぬやう

な事はねどんから舟の方はわるすと(悪くすると)いつで舟どめ(共に)やらるゝ事があるからなあ。時に一客あり「そいどんか(然し)こつちやどつくる事はつかりじやつで(此方は取る計りで)樺山「伊東さんな中々慾がふけて(深いから)一艘でも残けちや合点ぬしやらんで、あんまり慾がふけし跡で思ひが取付くもんじやちゆもさ(取付くとさ)よべも伊東さんが酒を飲んちやつで(飲むと云ふから)あんまり飲んみやつとみやと丁汝昌の魂が崇つさるひでめんなやつどちゆ云ふこつを(酷い目に逢ふと云ふた)と云ひつゝ、高笑し夫れより談、丁汝昌の事に移りしに樺山將軍は可哀さうな事をしたり彼は丁度川路正之進(故川路大警裡)さんのやうなヒヨロリとした人でありし明治廿四年彼が來りし時の禮として古銅製の花瓶を余に贈れり

と物語りぬ

○今鶉越

威海衛進撃の際、藤田中尉の一隊九馬嶺の險を踰ぬ此時夜暗く途絶ぬ積雪水りて滑かなれば進むこと僅に寸に及べば退くこと忽ち尺に至り攀ちて登んと欲すれば手滑り足逸す千艱萬難漸く嶺頭に達すれば皆な疲勞して呼吸急なり而して之を下るは上るよりも更に幾層の險なり否な殆んど下るの途なし此に於て衆皆な一策を案じ外套を脱いで臀に着け兩足を前に延して一齊に迂り數仞の下瞬間に達す外套破れて臀部に傷きたる者數名あり其困苦名状す可らず故に軍中傳へて今鶉越と稱しけるとぞ

○清兵に對する軍法

大島將軍歡喜山に在りて戦況を視察す時に敵眼下に薄り砲撃頻りなり然れども我軍敢て意となさず悠然として之を見る傍にタイムス新聞の従軍記者あり怪みて之を大島將軍に問ふ何故に敵を撃たざるかと將軍答へて曰く此際砲撃すれば敵皆な退き走る彼をして近く接着せしむるを要すと。記者曰く是れ何國の軍法かと將軍曰く是れ清兵に對する軍法なりと

○陣中の佳話

總督府の旅順に在るの日、陣中無聊に堪へざれば皆な飲食を以て樂みとす將官には毎週一回正宗酒の一瓶を給せらるゝ例なるが野戦衛生長官石黒軍醫總監は下戸なれば其酒は常に兵站總監部の高木大佐に贈くれり大佐一日又其酒を得んと思ひ先づ林檎二個を贈り之に左

の一句を添ふ

正宗は活人刀なり衛生部

石黒長官は之を見て微笑し林檎をば留め置き酒は贈らずして左の返句を贈れり

正宗の手に入るまでは只貰ひ

元來酒は管理部より贈るものなれば參謀部は酒を請はんとて左の一句を贈りぬ

○しなを取る畫策旨し參謀部

此談何時しか總督府の各部に傳唱せられて一時の佳話となりし

○老西郷、逸見十郎太を戒む

西南の役、薩將逸見十郎太猛銳驍悍なること絶倫なり陣頭若し兵士

の逃れ去らんとする者は悉く之を斬らざるなし老西郷十郎太を戒めて曰く子の爲す所、勇は即ち勇なり然れども恐らくは士心を失はん願ふに戦を督して叱咤激勵するの際、勢の茲に及ぶは是非なしと雖も亦た慮る所なかる可らず自今君をして軍に臨ましむるには木刀を帶ばしめんと一木刀を取つて之に授く

○病者奮戦す

澎湖島征討兵の中、航海の際二十四名の病死者を出し五十餘名の病者を見ぬ然るに拱北臺進撃の時、病む者慨然として嘆じて曰く戦ふて死するは固より我が豫期する所、唯だ病んで斃るに至ては實に遺憾なりと船量を發し食を廢せしこと三日に及び困憊起つ能はざる身なるにも拘らず奮戦馳驅して敢て後るゝことな○皆曰く或は病んで

死すべかりし身の此處に屍を曝すを得るは本懐なりと我兵の奮闘目を惹きしものあるは其原因一は此に存せり故に岩佐大隊長曰く妙な事が戦捷の原因となりました

○四將軍の評判

大島將軍(久直)と秋田の人なれど其言葉は東京風なり軍服の上に縮緬のヘコ帯を締め之に軍刀を挿し嚴寒の時候にも外套を着せずして起臥する所勇まし

大島將軍(義昌)は成歡、牙山、平壤の戦に其評判最も高し容貌端麗にして才氣あり

立見將軍は戦に臨むや勇猛當る可らずと雖も平日は温厚にして優しきことは婦人の如く部下を遇する慈愛至らざるなし是れ將軍の持に

評判よき所以なり

○大追將軍は薩摩男兒の本色を有し能く百難に堪ゆるの勇氣あり然し之が爲めに往々無理なる戦を爲すことなきにあらず缸瓦寨に於て二萬の大敵を前にして半数にも足らぬ兵力を以て數時間を支へ一步も引かざりしは無理の戦にはあれども此勇氣こそ士卒が信服する点なるべし尤も平素は極めて沈黙にして終日一言も發せざることあり

○敵の屋瓦を撤す

澎湖島の戦に敵兵民家に入り固く門を鎖し我兵の闖入を防ぐ第一聯隊の士卒河口常吉氏屋上に登り瓦を撤して下んと欲し撤すること一二枚。屋内の敵兵突然一發射上す然れども幸にして中らず河口氏泰然として益々撤す以て僅かに間隙を生ず敵兵復た突然劍を以て突出

し劍、屋を貫く河口氏即ち劍を握つて放たず時に偶々小隊長豊氏來り石を投じて敵を殺す

○銃を隊長に與ふ

十年の役、官軍瀬戸山の賊を追撃して美野原に至る賊兵力を極めて防戦す已にして詐り退く官軍又之を追ふ然るに賊兵數百名俄然左右より起る官軍其不意に出るを以て支ふる能はず瀧川大尉等賊の爲めに圍まる時に官軍の兵卒奥山庄太郎銃丸の爲めに腹部を傷けられ流血淋漓たり然れども勇氣凜然として敢て屈せず自ら創口を壓し大呼して曰く吾が銃此に在り隊長之を以て賊を撃つべし大尉其言の壯なるに感じ其銃を取て發射すること二回、賊、亦刀を揮ひて迫る大尉之を拒ぎしも不幸にして彈丸に中りて死す

○道案内者ごならん

寛甸くわんでんの役は實ひに無比ひの苦戦くせんにして我軍退却たいせつす時に森脇上等兵腹痛ふくどうと凍傷とうしやうと一時いちじに至り行歩すく頗る艱難けんなんを極む然れども尙ほ本隊を慕もふて追跡おひすること一里餘かず、三叉路さんさろあり右折みぎまげして入ること三四歩今は一步も進むこと能はず俄然がぜん其場そのばに倒る時に松岡軍曹も亦た凍傷に罹り獨り本隊に後れて夜半此地に達す遇たまく雪明りに透し見れば前途ぜんそ模糊もことして人影じんげいあるを認め呼んで曰く「誰れか」其時彼方の人影、僅わずかに動き答へて曰く其處そこに来るは松岡軍曹殿か私は森脇です軍曹即ち本隊は何れの道を取りしやと問ふ答へて曰く必ず此道なるべし一足の日本草鞋いばき委棄いして此處こゝに在り軍曹即ち相携あひたづさへて去らんとす森脇氏答へて曰く駄目だめですくモウ一寸も動うごかせせんアナタ先づれ出でなさいと氣

息既そくすてに奄々あんなたり軍曹之を憫あはれむと雖も其身も死地に臨み中々他を救助するの力もなく唯々ただ辞を以て之を勵はげすのみ森脇氏氣息既そくすてに絶んとしつゝ更に軍曹に問ふて曰く尙ほ後おれ来る者ありやと軍曹答へて曰く尙ほ二三人のあらん森脇氏曰く此處の途迷ちまひ易し自分は到底助かるべき見込なければ寧ろ此處こゝに道案内者として彼等を待たん請ふ軍曹殿は一刻も早く本隊に追ひ付き玉へと軍曹は尙ほも様々彼を慰め強て共に去らん事を勧めたれども彼れ首を掉つて聽かざりければ今と如何とも詮術せんすべなく泣々な袂たもとを分ちて銃劍じゆうけんを力に立ち去りしが其翌日に至るも森脇氏の途に歸り來らざりしを見れば必ずや同處に凍死せしならんと後ち軍曹常に人に語て曰く余が終生の恨事は實に此時に在り余が森脇と別れたる當時を思へば今尙ほ斷腸九回すと



○吶喊聯隊

饒勇無双の佐藤大佐が率ゆる第十八聯隊は先づ吶喊を以て敵膽を寒からしめ然る後、奮進突撃するを常とす平壤の激戦、海城の進撃、缸瓦寨の苦戦、牛莊の大戦闘皆自然らざるはなく敵兵十八聯隊を呼ぶに吶喊聯隊を以てす其戈を交ゆるに當りて苟くも吶喊の聲聞ゆれば即ち以て吶喊聯隊來れりと爲し戦はずして走るを常とせり

○伊東將軍の細心

伊東將軍は平生磊々落落の中、別に一個細心の所あり往年家宅を新築するに當り將軍は時々其工場を見廻しが一日書生に向ひ工場に打ちたる杭の數は幾本なるやと尋ねしが書生は頭を掻きながら知らざる旨を答へしに將軍は笑を含み人間は粗大のみでは行かず細き事々

でも心を留めねばならぬものぞと戒しめられしと古より由來英雄細心の處多し黃海に威海衛に千古の偉名を博したるも此の細心より來るものならん

○僕の功績ではない

一將校あり嘉悦似氏と云ふ氏ハ土城子の戦に夥多の敵兵を打殺せし人なり人あり氏に向ひ其軍功を稱せしに氏は微笑しつゝナアニ僕の功績ではないのさ只僕が彼様な所に遭遇したといふのが軍人としての幸福さと毫も自ら誇るの色なかりしといふ

○辭々血、言々涙

征臺軍の航海中二三の將校あり莨をのみながら喃々相語る「君は兵の室を見たか」見たともく實に可哀さうだ、あんな窮屈な所に置

きつゝ直ぐに死地に持て行くとは實に涙だよ。西洋あたりにはいざ知らず日本に於ては兵士と困苦を共にするが將官の本分だ自分はあんな結構な室に居りつゝ兵の室を見ると實に堪へなくなるよと此心あり以て將たるべし

○意氣堂々壯者を壓す

日清の戦役高千穂艦長たりし野村大佐嘗て人に語て曰く古より人生五十を以て定命とす吾れ今や此齡に達せり何時死するも吾に於て更に損失なし若し夫れ屍を馬革に裏むを得ば實に男兒の幸なりと其豪氣當る可らず

○勇兵

歩兵一等卒坂梅吉氏は身の丈五尺七寸臂力三人を兼ね金州守備隊の

中に在り復州の敵來襲の際、苦戦して軍帽に銃彈を被むり次いで旅順の敗兵逃れて金州に來るや同隊の一兵士と共に進んで敵群に突入し連彈して之を拂ふ偶々二虜あり背面より迫る氏一兵士と共に銃鎗を揮つて之に當る一虜斃れ一虜降る即ち降虜を率ゐて我が陣地に歸んとするに途中俄かに起つて一兵士の佩刀を奪ひ斬つてかゝりしかば氏は已むを得ず銃を倒しまにして先づ其脚を拂ひ遂に之を縛して隊長の下に引致せしに隊長は厚く氏等の功を賞し捕虜は其脚を挫かれて歩行する能はざるを憐れみ再び郊外に曳いて縦たしむ然るに此捕虜飽まで不敵にして再び不意に起り氏を目がけて斬りかけしかば氏は大に憤はり一刀の下に細首丁と打落し其手際太だ鮮かなりしかば衆皆な手を拍つて稱揚したり此戦に於て氏は背部に彈傷を帯びし

かど包んで人に語らず窈かに細帯を施し忍んで苦痛を訴へざりしが間もなく轉陣の命ありて三十里堡へ進發するに臨み隊長は氏の行歩に異常なるを知り怪んで其故を問ふ氏猶實を訴へず多分レウマチスの爲ならんといふ隊長信せず醫官をして之を検せしめたるに果して彈痕ありしかば隊長始め一同打ち驚き何故今まで之を匿せしやと尋ぬるに氏答へて曰く負傷せしを訴へなば從軍を免されまじきを恐れてなりと衆皆な其深勇に感ず

○鼾聲雷の如し

旅順攻撃の部署定りし夕、山地將軍、令を全軍に下し了つて晚酌數盃、忽ち牀上に醉臥するや鼾聲雷の如し人あり戯れていふ怪む勿れ鼾聲大蛇の如くなるを彼は獨眼龍なりと

○生きた標的に向て射撃を演習せよ

百尺崖攻撃の際、一兵あまの一の敵彈左腕を貫く兵士自若舉措常の如し翌日隊長之を見るに其創輕からず直ちに之を病院に送る醫官其創を検して曰く何の處にか之を受けたりと兵士笑ふて曰く昨日某所の演習に於て之を受けたりと又砲兵某隊長百尺崖所の砲臺に在り頻りに劉公島及び敵艦を射撃す戯れに傍人に語て曰く國會議員に彼是言はれず已の腹を痛めぬ彈藥にて十分生た標的に向つて射撃を演習せよ此時を外しては復た好演習の時なからんと是れ全く實戰を以て演習となすなり又軍艦の射撃演習は其費用少なからず故に平素之を演ずること稀なり黄海及び威海衛の海戰以來實彈を放つて砲臺及び敵艦を射撃すること數十回皆曰く十年間の演習を一時に卒業せりと

是亦實戰を以て演習となすものなり

### ○寒氣學校

伊東將軍人に語て曰く余の如きは今僅に寒氣學校の尋常中學校位を卒業したるなり野津將軍の如きは既に大學科を卒業したるものなりと時に側より水雷艇の乗組員は如何と問へば將軍は答へて曰く彼は既に博士となれるなりと好譬喩と謂ふべし

### ○一足の靴を磨けば足る

一千八百十二年の戰に佛軍の一將校左足を傷け軍醫之を診察したるに此は到底切斷せざる可らずと云ふ將校少しも驚かず然らばとて部下の士卒の前に於て手術を受けたり其時一卒のいたく悲泣するを見て笑ひながら言へるは「汝は何とて左様に泣くぞ吾が一脚を失ふ

は中々汝の幸福ならずや汝明日よりは只だ一足の靴を磨かば足るなり」と

### ○赤手の敵を撃つは心に屑させず

千八百八十年英國の艦隊、西班牙のセント、フェルナンド、ド、オマオ一の堡砦を攻るや一夜闇に乗じて敵營を襲撃す一英兵あり挺身敵壘を踰へて進む双手各々一劍を提ぐ蓋し縦横亂撃敵兵を屠んと欲してなり偶々敵の一士官驚起して劍を操るに違わらず蒼皇甚し英兵乃ち之を呼びて其一劍を視して曰く「赤手の敵を撃つは自ら心に屑しとせざる所なり余請ふ我劍を與へて汝と俱に一快戰するを得ん」と勇氣已に敵を吞む士官辟易して退きしとす

### ○嗟只汝を殺さんのみ

ミンデンの役、佛將ビエルエールの一隊、猛烈なる砲撃に逢ふて死傷算なしビエルエール從容として手に煙草函を携へ陣頭に立て其兵を勵して曰く「汝等何を恐る、砲撃何かあらん是れ汝等を殺さん嗟只汝等を殺さんのみ進め進め敢て恐るゝ勿れ」と

○一身百餘人を殺す

南米ブラジルの役、葡萄牙の軍偶々士兵の圍む所と爲て大に困む兵ロドリクエツツなる者あり一火薬函を携へ來て衆に告て曰く「余敢て一身を犠牲として一擧敵衆を塵殺せんとす卿等請ふ暫らく身を避けて進むこと勿れ」と彼れ乃ち夫の火薬函にマツチを加へ之を地に擲つと共に直ちに爆發する如く装置し挺身敵軍に肉薄して其群中に投ず爆然一發士兵百餘人之に死す而してロドリクエツツ僥倖にも萬

死を免れて還ることを得たりといふ

○死を忍るゝに足らん

シーザル天性剛毅にして毫も身体防衛の事に介意せず人屢々其暗撃に逢んことを恐れ出入必ず護衛の士を隨へ若くは兵刃を帯びんことを警告す

○コンラツド少佐の剛勇

マレンゴの役にコンラツド少佐は砲丸を受けて一脚を失ひたるが毫も屈する色なく地上に倒れながら味方の砲兵隊に注意したり時に陣中の士卒ども少佐が此有様に駈け來り他所に送り申さんといふに少佐頭を掉り方々は其持前の鐵砲に注意せられよ且は今少し下の方に眼を留められよと

## ○誰か知らん華盛頓なりしを

英國のフエルダーソン少佐は北米合衆國獨立の戰爭終るや其友人に書を贈りて左の如き奇聞を傳へたり「騎兵の服を纏へる敵の一士官は突然我隊の方面に向ひ來れり彼は我が右翼を距る一百ヤードに充ざる所に近づきて而も尙ほ我等の前面に在るを知らざるものゝ如し暫らくして又一人の後方より來る者あり彼は身に藍綠色の衣服を着け頭に昂立せる帽を戴き栗毛の軍馬に跨れり予は其誰れたるやを知らざりしが部下の兵士にさゝやき潜かに彼の二人に近かづきて射殺すべきを命せり而かも予は此行爲の卑劣なるを恥ぢ直ちに命令を取消し以て敵の舉動を伺り時に彼の騎兵士官は獨り馬首を回らして元來し道へと引返せしが他の一人は依然益々進みて且我等を隔

つる一百ヤードに足らざる所に來れり是に於て予は林中より跳り出で彼に近づきつゝ一聲高く誰何せり彼は止まれり而かも彼は予を一瞥せしのみ更に意に介せざるものゝ如く又々馬を進めんとせり予は再び聲を掛け同時に銃を擬して「止め」の暗號を爲せり然るに彼の豪膽なる此卷機一髮の秋に處して更に驚ける様子なく悠々乎として馬を進め少しも顧ることだに爲さず當時我等の距離たる頗る接近しければ若し予にして手早く發射せば彼の遁逃せざる中に少くも六發の彈丸を彼の身邊に蒐注せしむること敢て難事に非ざりき予は一たびは斯く爲さんかと思へり而もまた願れば予に向て更に抵抗を爲さざるのみならず容優儼然以て其職に従へる快男兒に對し卑怯にも背後より之を狙撃するが如き予の最も不快とする所なれば茲に彼を

追ふことを止めぬ後ち予は俘囚の言を聽くに曰く此日の朝、大將華盛頓は獨り佛人の騎兵士官を伴ひ兵士と伍して戦へりと而して其服装と云ひ乗馬と云ひ予が見し者と違はざりきア、誰か知らん予が曩に誰何せし者は實に米軍の生命たる華盛頓其人にてありしならんとは而かも予は當時彼の果して誰たりしやを知らざりしを悲ます」云々と

○餘り満点過ぎはしないか

中村、東條、村田の三佐官一夕宴を某所に開く中村大佐携ふる所の佃煮數種を出し山海の珍味何でも召し上れと云ひしを村田少佐スカサズ餘り満点過ぎはしないかと正宗の酒數種の佃煮共に數日の饑渴を一夜に取り返さんことを計る酒半ばにして大座曰くドウダ酒を暖

やうぢやないか少佐曰く餘り満点過ぎはしないか山海の珍味に加ふるに暖き酒を飲まうなどと、は罰が當るせ東條中佐曰くモ一僕は鹽鮭の焼たので茶漬を飯食つたからイツ死んでも差支へぬぞと斯くて夜の徹するに従がつて興益々佳境に入る然るに大佐少佐は甚だ克く飲み中佐は健啖の大將軍、井大の茶椀を手にしたる儘、馬食時を移しやがて、宴を撤し洒落を止め談少しく眞面目となるや三氏往時を追懐して曰く十年西南の役、敵兵強猛深更幾たびか刀を抜いて突貫す陣中飲食の咽に下る違なく草鞋を解くなどは思ひも寄らぬ話なりき然るに幾ら相手が支那兵なればとて酒宴を開きて高談豪話、寢るには高枕あり暖爐あり安きこと平生に異ならず實に彼等の弱さには驚き入るの外なしと少佐更に語を次ぎて曰く國の文明に進むに従

ひ戦鬪の法も亦革新するものなり今日歐洲の本場にては整々の旗堂々の陣にて軍を進むる正則の戦鬪には突貫などいふことは夢にだも見ざる所。只だ土耳其兵は短刀直入大に十年の役に類するものあり乃ち文野の程度は適々以て戦鬪法に大差を生ずる所。併し今回の如きは敵兵に文明の素あるに非ずして連戦連敗せるものは彼等の突貫襲撃をなさざるは文明の法を知るが爲めに非ず彼等こそ何處までも取り處のなき弱兵なれど罵倒一番。意氣大に昂がり三更相別れて寢に就きしが終に永く一軍中の笑話を残せり

○二氏に優れるものあるを知る

尾島中將。佐々木東洋の二氏。一夕數客と會飲して談會々宗教に涉る中將曰く滿座の諸君須らく禪學を修められよ予は元短氣にして聊

の事にては癪に障り憤慨する癖ありしが禪學に心を傾むけてよりは此癖大に直り眞言の釋氏に法を受けて叱咤小兒の如く呼ばるゝも豪も腹の立つ事なし是れ禪學の徳なりと佐々木氏側より之を助けて曰く如何にも將軍の説の如し予も將軍の勸めに従ひ禪學を志せしより酒癖大に減じて今は酒に吞まるゝが如き事なしと滿座謹聽したる中に一名の軍人あり笑て曰く二氏の説大に善し然れども予は自ら二氏に優れるものあるを知る即ち予は未だ禪學の何たるをも解せざれど米だ妄に短氣を出さず又酒強をもなしたる事なし禪學の徳果して此れに止まらば敢て修むるの必要を見ずと二氏大笑して之は一番出しぬかれたと然るに釋律師此話を聞きて人に語て曰く軍人の言大に善し彼れ身を軍規の嚴正中に置き今や一層心を忠君愛國の一点に注



ぐが故に自から安心立命の本旨を悟りて然るのみと大に我軍人の強  
勇なる所以を賞揚したりといふ

○佐藤大佐學生の見舞を受く

佐藤大佐廣島の病院に在つて療養中廣島縣安藝郡牙田村長有志者十  
數名、牛田小學教員と共に同校生徒十九名を引連れて大佐を病床  
に慰問したり時に大佐は病氣も追々快方なるを以て年長者に一々接  
見したる上、又生徒を病室に入れ突然床上より號令して曰く二列に  
作れ(生徒)二列となる(大佐)左へならべ(生徒)左の手を腰にあて右  
の手を垂る(大佐)番號を(生徒)一、二、三と各番號を唱へ頭を次の番  
に掉る(大佐)二番に問はん住所氏名如何(二番生)某地某氏名(大佐)  
三番の後列は如何、七番は如何と一々問ひ了り更に衆に向つて曰く

お前等の此處へ來たのは何の用だ(一番生)アナタ見に來たのでガン  
ス(大佐)フン余を見に來たといへば人形のやうに思つてか(一番生)  
イエ支那へ軍に往きなさツタケン(大佐)軍に往ツたからツて見に來  
ることはあるまい(二番生三四番生)君の爲め國の爲め軍に往きなさ  
ツて怪我なさツたけん……ソレで見舞に來たんでガンス(大佐)さ  
うか夫は有難い併し軍に往くと怪我をしたり又は死んだりするが、  
さうすると君の爲になり國の爲めになるも親をどうする親が養はれ  
んど忠義になツても不孝にはならぬか(生徒)答ふる能はず黙して互  
に面を見合す(大佐)莞爾として徐ろに曰く君に忠義なれば矢張り親  
にも孝行になるぢや君の爲めには余も此様に怪我をしたと云ひなが  
ら負傷の足を示す(足は膝の上より切斷し繃帯にて纏り)怪我して

も死んでも君の爲め國の爲めなればよろし。また此先き某國と軍を  
 する事もあらん某國と戦ふこともあらんお前等も兵士となりて往く  
 事もあらん其時は命を抛て君國の爲めにせねばならぬ今日はよく來  
 て呉れた……此に於て一同敬禮し別れて出づ大佐亦笑つて見送り  
 しといふ

○篠原の率直

陸軍少將篠原國幹近衛兵の司令官たるや一夜西の丸に火あり時に國  
 幹兵營に在らず火罷で後に歸る軍法會議之を詰責し將に處分する所  
 あらんとして之を鞫問す國幹默然之を久くして曰く昨夜某樓に飲み  
 大醉前後を妄却して眠りたるが爲め變に會すること能はざりしと云  
 へり

○飢饉して一語を發する能はず

野口參謀官、旅順の各隊を視察す其饅頭山砲臺に赴きし時は正午に  
 近し則ち守備兵に就いて湯を求めしに兵士黙して答へず水を求むれ  
 ども亦黙して答へず參謀官怪んで曹長に詰問すれば彼は叩頭之を謝  
 して我等昨夜襲撃の際、軍裝を輕うせん爲めに外套背囊を露營地に  
 棄て立出たりされば萬一の食物なる道明寺すら僅に二食分を有する  
 のみ其れすらも二人にて分食せしほ茲にて昨夜來ロクく飲食をな  
 さず且つ斯る暴風雨の中に立ちて外套も纏はねば誰一人生きたる心  
 地する者なく、さてこそ御返答も仕らざりしなれと云ふに參謀官は  
 いたく同情を催ふして腰囊より煙草を出して之を彼等に分與し又一  
 食分の道明寺を取つて與へしに彼等は幾度か推戴きて湯水もなけれ

ば其儘にて嚙食へり參謀官は、いよ／＼氣の毒になり自ら水を酌み火を焚きて湯を沸しブランデー少量を交せて彼等に吞ましめたるに彼等は漸くに勢力つきて語を出すに至りしといふ

○池邊の慧眼

十年の役賊將池邊吉十郎も亦壯兵を率ゐて薩軍に應ず薩の先鋒熊本に近かんとするや吉十郎軍器を別府に援けんとて自ら出發せんとす傍人其輕卒を諷む吉十郎肯かずして曰く僕近日城内の狀況を見るに兵糧を貯へ地雷を敷設し固く籠城の意を決す加ふるに谷干城謀畧あり樺山資紀亦之を輔く而して士卒の舉動沈靜にして平日に異ならず現に今朝城内火を失するに當りても絶て狼狽するを見ず此れ決して悔る可らざるなり然るに薩軍は慄悍無謀にして眼中敵なし恐くは

敗衄を取らん我が戰畧を授けんとするは之が爲めなりと

○艦隊は丸て犬同様です

某代議士、伊東將軍を大連灣に訪へる時、伊東將軍には從軍代議士一行に對して第一に臨時帝國議會を送りし感謝狀の禮を述べ夫より何氣なく笑ひながら「イヤモウ艦隊は近頃丸で犬同様です」「盗人の番をする、猪や兎の居るか居らぬかを嗅ぎ廻ると云ふばかりでアツハ、ハ、ハ」と快談の中艱難困苦の事を表さざりしが此時將軍の苦心は察するに餘りあり

○米國新聞記者の肝膽か寒からしむ

日清の戰役清兵の銃甚だ銳利にして十二聯發銃の如きは二個の銃身を重ね下部に裝彈して上部の筒口より一九又一九を發射するを得る

ものゝみ然るに旅順の戦止むや從軍の米國新聞記者、山寺將軍に謁して曰く彼の十二聯發銃は素と我國より清國に賣渡せしものなり然るに今回の戦争に於て余は我國製造の銃を以て貴國の將士を殺すに至れる不幸を悲しむと將軍噓然として笑ふて曰く然らば余は貴國が向後益々其銃を清國に賣渡されんことを望む如何となれば我日本國は益々多く其銃を清國より無代價にて貰ひ受くることを得ればなりと記者の肝膽をして寒からしめたり

○敬愛せる福原大佐

陸軍大佐福原和勝氏嘗て清國に在り故を以て上海には外國人の知友多く且つ其敬服する所と爲る西南の役、大佐の戦没するや其報上海に達す各國領事之を追悼し半旗を掲げて吊禮の意を表す上海道臺之

を詰る各國領事答へて曰く吾輩等の敬愛せる福原大佐戦死すと聞き其死を追悼す敢て貴國の責問を要せずと道臺之を聞き大佐の生前名望者なりしに驚き終に復た之を問はず

○桐野の友誼

桐野利秋氏の勇猛なるは人皆な知る所なるが其友誼の厚きも亦絶倫なり十年の役薩軍連敗の後、城山の將に陥んとするや官軍一個の薩兵を捕へ來り大山將軍之を鞠問す薩兵曰く桐野の使命を奉ずる者なりと一ツの服紗包を呈す之を披けば中に金時計と紙幣若干ありて大山將軍に贈るの書信を添ふ其書信の一節に曰く平素莫逆の情交忘れんと欲して忘るゝ能はず今や運盡きて死するに當り此品を卿に贈りて紀念となす云々將軍爲めに消然たり

○號令の聲雷の如し

長屋少佐は旅順攻撃の際、二龍山の第二砲臺に向ひしが敵彈雨の如く來る此時少佐は隊を挺して砲臺に肉薄し令を下して曰く「雷落ち雷閃めき敵彈雨の如く耳邊を掠むるに當りてや敵に向はん兵士は決して他を顧る可らず只だ長官の命令を確守して前進するの一事あるのみ」と其聲雷の如く滿隊に響き渡れり。此時頭上をヒュー〜と音して速射砲彈の通過せし事幾回なりしを知らず然れども少佐は神色自若として號令を終りたりといふ

○身を馬背に縛して號令を下す

十年の役、薩兵猖獗を極む吉松大佐植木に戦ふ負傷して馬より落つ馬丁に謂て曰く創傷甚だ重し假令病院に入つて加療するも生命は到

底覺東なし我れ寧ろ戰場にたづて死せんのみ汝我身体を馬背に縛せよと馬丁其意を狂ぐ可らざるを知り直に其言に従ふ大佐乃ち馬背に伏し陣中を縦横に驅して號令を下す已にして敵彈の爲めに其縛繩を射斷され地に落て死す後之を検すれば体内八個の重傷を受け居たりといふ

○佐藤大佐の勇猛

我軍牛莊城を圍むや敵遁るゝに途なく防戦尤も勉め我軍一時遼巡す時此佐藤大佐憤然として曰く報國の期今日を措て將た何れの秋にかあらんと前——の號令鋭く己れ眞先に軍旗を押し立て雨の如き飛丸を冒して突進し敵線を距る僅に三百メートルの所に至る折しも飛來る敬の一九、大佐の足を貫く大羽屈せず起き上りて旗手の聯隊旗

を取り淋漓たる鮮血を流して突進す一軍爲めに大に振ひ敵墨直ちに  
陥る

○諸英雄の吟詠

砲烟彈雨の間に立ち或は籌を帷幄の中にめぐらすの時、猶ほ綽々  
餘裕あるものは夫れ英雄の胸次か左の吟詠は戊辰、西南、征清の三役  
に於けるものなり

榎木武揚、降服の意を示す詩あり曰く

孤城看將陷、軍氣亂如麻、殘卒語深夜、精兵異往時、

單身甘就戮、百歲愧愆期、成敗兵家事、何須苛論爲、

大鳥圭介(今の樞密顧問官) 戊辰の役官軍に降り江戸に送らるゝ際  
舟利根川を過ぐ詩あり曰く

一場春夢恍無痕、戰血染衣紅尙存、

兩岸秋風數行淚、扁舟載恨過利根、

桐野利秋、會津出陣中の詩あり曰く

國家政刑甚於繳、軍將機先密似羅、

却思遲日花間鳥、宛轉和鳴樂意多、

谷干城、熊本籠城中詩あり曰く

人在圍城貌已擢、相看相笑撫髭鬚、

花落花開不關得、只愛盆梅一兩株、

篠原國幹、悶も遣るの詩あり曰く

飲馬鴨綠果何日、一朝事去壯圖差、

此間誰解英雄恨、袖手春風咏落花、

西郷隆盛、城山の洞中に在りて吟詠せし詩あり曰く

慷慨多年過此身、  
滿腔勇氣爲誰振、

吶喊聲裏踏三岳、  
復作洞雲深處人、

三浦梧樓、西南の役平ぐや一詩を賦して曰く

亂魁就戮事全平、  
十萬王師旋錦旌、

今日山河砲烟絶、  
秋澄一百二都城、

山田顯義(陸軍中將) 西南の役球摩川の陣中に於て詩あり曰く

水色如銀月色流、  
砲聲漸絶夜悠々、

清風一陣吹塵去、  
占得球摩川上秋、

池邊吉十郎(賊將) 十年の役、自己の戦袍に書して曰く

丹心只期魯陽戈、  
奈此皇威日墜何、

聞説蝦夷交換事、  
大夫亦自涙痕多、

別府晋介(賊將) 西南の役、熊本城を攻むるに際し詩あり曰く

植木險田原坂壘、  
崎嶇百戰草亦般、

義師東定中原後、  
踏破朝鮮山又山、

乃木將軍、征清の役蓋平城外に出て杜牧の「清明時節雨紛々」の韻

を歩して曰く

干戈朔北事紛々、  
一望渾無不斷魂、

節及清明風物冷、  
無楊綠淺劫餘村、

井上將軍、が秋山騎兵少佐を訪ふて歸途詩あり曰く

戰聲既絶白鴉飛、  
一帶長沙來往稀、

匹馬訪朋蘇店畔、  
晚風歸路拂征衣、

○隱岐大佐、和尚島攻撃の際詩あり曰く

脚枚夜半過敵營、三千將卒肅無聲、

吶喊忽起堅堡陷、霹靂又認礮彈迸、

和尚島上旭旗揭、大連灣外日艦迎、

此間壯快人知否、攻撃聯隊有餘榮、

○石井大尉、金州城に於て詩あり曰く

渤海風濤逐日狂、貔貅幾萬恨偏長、

金城一夜峭寒月、遙照遼東萬里霜、

○大室少佐、仁川近海航行中の詩あり曰く

料知航路近仁川、斜截金波向大連、

艙室燈殘人馬寂、一鉤寒月在中天、

又大連灣近海航行中の詩あり曰く

艦首鐵機凝不動、堅氷即是夜來波、

裂肌墜指北風下、獨見船師起守舵、

又上陸の際、船員に示す詩あり曰く

笑駕蒼溟萬里風、一船親愛一家同、

吾徒不化沙場骨、別後還逢渤海中、

○立見少將、牡丹臺露營中の詩あり曰く

素是清將趙括流、漫持平壤不知謀、

萬雷忽過夜淒寂、月白牡丹臺上秋、

又九連城攻撃途上の詩あり曰く

潜々彈雨硝烟間、躍馬一鞭過虎山、



九連城畔暮雲暗、 惘察清將今那顏、

又鳳凰城中ほうおうじやうちうの偶作ぐうさくあり曰く

高麗之山鴨綠流、 懸軍長駟入滿州、

寒夜月明意自潔、 鳳凰城裡斷奇籌、

又樊家臺はんかたいに於て雪中せつちゆうせんどう戰鬥さいの際さい、詩あり曰く

雪滿山巔寒最強、 幾千將士氣更剛、

樊家臺上戰方熾、 一劍塵收斃犬羊、

又鳳凰城中ほうおうじやうちうの偶作ぐうさくあり曰く

胡雪霏々侵革衣、 朔風凜烈縱寒威、

退守進攻皆有範、 閑休人馬待時機、

又

留守鳳城四閱月、 每聞捷報劒空鳴、

難忍功名爭競念、 夢魂一夜屠清京、

又友安大佐が愛せらるる所の梅花ばいけわを賞し併せて所感しょかんを述ぶる詩あり曰く

り曰く

同心戮力幾回戰、 攻撃何難藩與遼、

功名莫意命令重、 閑費梅花傾瓠瓢、

又征清軍中の所感しょかんと題する詩あり

小少纒修六韜畧、 曾愆順逆抗王師、

皇上聖明不問罪、 報恩雪辱在斯時、

○ものは盡し

旅順蓋平に於て殊勳しゆこんを建てたる富田陸軍中尉は左の「ものは盡し」を

作れり

○支那にて可笑きものは

○婦人の足の小さきこと ○婦人の額を廣くすること ○家毎に二利の言葉を紙に記して貼付たること ○人民の無氣力なること

○支那にて困るものは

○便所のなきこと ○南京虫の多きこと

○支那にて嬉しきものは

○行軍に疲れたるとき家に入るとき ○恤兵部より日本酒と煙草を贈られたるとき

○支那にて厭なものは

○支那人の口の臭き(蒜を喰ふ故に)こと

○支那にて多きものは

○道路の不潔物 ○虱 ○豚 ○崩れたる烽火臺(高サ大概六七丈警報に備ふ)

○支那にて案外なるものは

○煉瓦造の家の多きこと ○壁の堅固なること ○山野に樹木の少きこと ○畑に畝の長さこと ○日本出来の石盤繪多き(小兒繪最も多し)こと ○支那繪の少きこと ○家屋内の不潔なること ○戸締の堅固なること ○婦人の裁縫に巧なること ○木工の不器用なること ○銃砲の精巧なること ○刀劍の鈍なること ○降雪雨の少きこと ○河水永結の多きこと

なりと以て遠征の勞苦、支那の内情を知るに足る

○箸を以て日本酒を挾む

蓋平に於て從軍記者某、夜食せんとて本舎營の將校室に至る堺通譯官榻に凭つて氷砂糖の如きものを箸にて挟み頻りに爛瓶の中に投じつゝあり某不審に堪へず开は何なりや砂糖湯にても作る爲めなりやと問へば否な是は日本酒なりと答へ即ち其の一塊を挾みて某に與ふ某之を掌上に受け口に含みて味へば果して純然たる酒の凝結なりき此一事以て滿州の寒威如何に凜烈なるやを察するに足る

○危険に兵を行る

十年の役、大山少將(今の大将)兵を率ゐて戰に臨む時に或は兵士に戯れ又は滑稽談をなし若くは險路に當りて競争を試む既にして戰終り其進軍したる道路を顧るに少將の戯れたる處は必ず險路なるか

又は賊軍の伏兵ありし所なり一軍爲めに汗を拭ひて其頓智に服す爾後衆皆な是れ少將の秘訣たるを知り相謂て曰く少將の滑稽出るときは軍必ず危しと一書に曰く俗歌の滑稽調にオヤマカチャンリンと云へるは蓋し……大山が道化……より轉訛せしものなりとあり

○山田市之丞の機敏

戊辰の役、長藩の隊長山田市之丞(顯義)會桑の兵を京師より逐んと欲し兵を率ゐて攝津の西ノ宮に陣す時に西郷吉之助(隆盛)も亦京師に在り大山彌介(巖)を使とし山田に傳ふるに速に兵を進んことを以てす大山、西ノ宮に到り陣門に入つて山田に逢んことを求む須臾にして山田出で、會す大山之を見るに軀幹矮小にして年齒亦弱冠なり平日聞く所の英名と相適はず心竊に之を悔るも西郷の令を傳へざる

可らず因て速に兵を進む可きことを陳ぶ山田曰く諾と直ちに左右を顧みて命令を下す既にして大山其陣門を辞し去らんとするや山田の兵、部署整然として悉く備り敢て犯す可らざるの色あり大山是に於て大に山田の機敏に感服せしとぞ時に山田の年齢二十二、大山は二十四年なりしと云ふ

○馬上常に團扇を携ふ

打狗坑の敵壘突貫の際、内藤大佐亦た軍中に在り時に炎暑熾くが如く殆んど堪ゆ可らず大佐は馬上常に團扇を携ふ銃射已に交る我軍は桃仔園臺北の聯絡を目的として歩々前進んだ大佐常に先頭に在つて諸兵を督す「前へくくく」の號令響くが如し銃彈雨の如く大佐の團扇を貫くこと兩三彈、大佐平然尙ほ「危ひぞ前へくくく」の號令を連

呼して又一語の彈に及ぶものなかりしと云ふ

○一首の和歌敵の軍氣を沮喪せしむ

幕末に當り天誅組と稱する浪士大和に亂を起し官賊兩軍吉野川に相對して陣す時に官軍中より二三の老武者來り兜を脱ぎ樹枝を折り火を焚き酒を暖め之を酌んで踊躍し賊軍を愚弄するが如き有様なりしが何やら短冊やうのものを樹枝に懸垂して歸れり浪士之を見て心憎き業なりと思ひ追ひ掛て討ち取らんとしたれども之を制する者あつて止め兎に角其紙片を取り寄せて見しに

討つ人も討たるゝ人も心せよ

同じ御國の御民なりせば

とありしかば之を見聞する者心中竊に實に斯くこそ感じたり爲め

に一夕の中に浪士の落ち去る者甚だ多く大に其軍氣を沮喪したりといふ

○市府の爲めに犠牲を爲る

英王エドワード第三世嘗てカラサス府を攻む府民城に據り拒守して降らざること一年餘、其間大に英兵を失ひしかば王大に怒る既にして府民糧盡きて降らんとせし時王之を許さず悉く城中の者を殺し財物を奪んとせしも將校等其慘酷なるを諫めて稍や寛典を議しければ王は首領が露頭跣足にて頸に繩を纏ひて衫を着けて城門の鑰を持來らば他日一命を赦さんと決せり此命令の城内に達するや居民皆な愁嘆啼哭す時にユーステースと云ふ者あり曰く苟も吾が市府の難を救ふを得ば我が血を流すとも恨みなしと獨り英軍に赴んとせしければ

皆な其愛國の義氣に感じて他の五人も亦之に與したり是に於て六名齊く王の命に従ひ醜体をして英軍に赴きしといふ

○豈に圖らん園丁は將軍なり

モルトケ將軍少壯の時、非常に貧しく家計上の困難多かりしと云ふ或る時ギボンの羅馬盛衰史全部を四百弗にて翻譯する約定にて九卷中七卷まで畢りし時、不幸にも其書肆は破産せしかば氏は一錢をも得ざりしとぞ將軍の生活は實に質素にて大元帥たる身分にてありながら常に普通の兵士と同じ麵包を食したりとぞ後に獨逸軍の頭領なる重任を退きし時も依然單純なる生活を爲し最も花園を造ることを好みて身には園丁の着る粗服を纏ひ古びたる麥藁帽子を戴き手には花剪刀を持ちて日々園中を逍遙して此上もなき樂みとせり或る時將

軍ガヅレスデンに近きブレースウヰズなる親族の許を音づれ暫らく  
 滞留し居れりとの噂聞ゆしかば或時此名高き將軍を見んと思ひで其  
 處に赴きしに其家に近き園中に粗服を着けたる園丁の老人が居たる  
 を見て之を呼びかけ「何時頃に来れば將軍の姿を見らるべきか」と  
 問へば老人は「三時頃に……」と答へしかば其人は一マークの金を  
 取り出して老人に與へて去れり扱て三時頃になりて再び來て見れば  
 先刻の老人は數多の人に圍繞されて居り人に聞けば此園丁は即ち將  
 軍なりしかば其人暫らく呆然たりしと其時將軍は其人の手を把りて  
 「ア、先刻は君に一マークを貰つた」  
 又將軍の心の平淡なるはシーザーに似たる所もありて或時其眷族の  
 一人が兵法の奧義とは如何なるものかと問ひしに將軍は答へて「唯

常理のみ何の難きともなし」と云へり、先づ商量してさて之を行ふと  
 ふ云格言は將軍の畢生を貫けるが如し又將軍は寡言の質にてありし  
 と云ふ彼の有名なる獨佛の戦争始らんとする時將軍一日街道を歩行  
 せるを見て或人時事に關する話を聞くと進み寄りて「成行は如何に  
 ですか」と問へば將軍は「ハイ拙宅の甘藍の方は順よく舒びて居りま  
 すが馬鈴薯は少し雨が欲しい方で……」と答へしといふ

○死に臨んで武装を爲す

英國のセワード伯爵は豪勇の聲名ありしが蘇格蘭征討軍に従たる其  
 子が殺されたりとの報に接するや取敢ず其創傷は身体の前なりしか  
 將た後なりしかを尋ね前なりしと聞くと「夫れを聞いて安心せり我も  
 我が子も死する場合には、さる最後こそ望ましけれ」とて大に喜べ

り其後氏は重き病に罹りて久しく床に就き居たるが今や終焉の近か  
んとするを知つて「獸の如くノタレ死をするの軍人たる者の恥る處  
なり」と言ひながら床を這い出で俄に武装をなして立ちながら死し  
たりとぞ勇ましくも亦奇らしき終焉と謂ふ可し

○交際場裏より拒絶せらる

北米合衆國のグラント將軍大統領となりし際交際社會に有力なる或  
る一派の人々相約してグラント一家は拒絶して交際場裏に入らしめ  
ざらんと欲し現に交際社會の王とも稱すべき某紳士の催せる大宴會  
にはグラント一家を招待することなかりき當夜會主の婦人は某外國  
公使に語るに小賈職工と雖も苟くも才能ある以上は之を政治家と爲  
すに於て敢て異議なきも去りとして我等必ずしも此種の人々と相交る

に及ばじとの旨を以てせり蓋しグラント將軍曾て製革職たり又は辻  
馬車の馭者となりてセントルイスの街上に車を驅りたるこかあるを  
以て彼等乃ち之を賤みて共に齒するを恥とするなり平民主義の米國  
に於て此極端偏僻の説を主張する者あるは未だ全く文明の佳域に進  
まざるものと謂ふ可し

○ヴァイラルス將軍危難に伴ふ

佛王ルイナ四世常に其將ヴァイラルスを賞揚して曰く「凡そ危険艱  
難の在る所ヴァイラルス亦必ず在り」と其驍悍猛勇以て知るべきなり  
某處の役、戰鬪必ず激烈ならんことを慮り人皆なヴァイラルスに勧め  
て胸甲を装はしめんとす彼れ之を肯んせずして曰く「好意多謝、然  
れども余は余が微軀を以て敢て我兵士の命よりも貴しとせず」又

一日人あり進退少しく警戒を加へ以て危地に臨まざらんことを望む  
 とヴァイルラルス答へて曰く「己れ亦た部下の兵士と與に挺身危地に  
 臨みて願ざること是れ當さに主將の爲さざる可らざる所なり」と  
 ヴイルラルス將に死せんとして病蓐に在やる侍僧偶々之に告るに  
 ハーウヰツク公爵が堡壘巡視中敵の砲丸に斃れたる事を以てす彼れ  
 乃ち叫んで曰く「余常に公爵を以て福運必ず余の上にあらんと爲せ  
 り今や果して期する所の如し噫」と言終つて忽焉として逝けりと云  
 ふ

○軍事狂

ジョージ二世がタエベック遠征軍の監督を大將ウールフ氏に委託せ  
 んと云はれし時、大臣の間に反對説を述ぶる者頗る多く中にもニユ

「カツスル侯の如きは殊に甚だしくウールフが軍事を語るの舉動全  
 く狂氣せる者と見ゆれば此人に大任を帯ばしめ給ふことは猶ほ御熟  
 慮ありたしとジョージ二世に願ひしにジョージ二世は聞きも了らず  
 「何に狂せるとな誠に狂氣せるとな誠に狂氣せるならば朕は其狂氣  
 が傳染病にて我軍の將校一同に傳染せんことを望ましけれ」とい  
 はれしとぞ

○英雄の機智

ループの名將エバミノンダス曾てラセドモニアを征す進軍の初め其  
 槍飾翻々風に飛びてラセドモニア人の墓上に落つ將士皆な其凶兆に  
 あらざるやと疑ひ憂慮措く能はざるものゝ如しエバミノンダス獨り  
 欣然として曰く「嗟乎何ぞ夫れ憂ふことあらんラセドモニア人は將



に死せんとするなり看よ看よ彼等已に其墳墓を飾て葬儀に備ふるに  
 あらずや」と兵氣大に振ふ又一夜一大流星あり天の一方より飛び來  
 つて地に隕つ衆恐るゝこと甚だしエバミノンダス乃ち曰く「天我國  
 に光輝を與ふ」と  
 シーザル懸軍萬里、遠征に上るの際、軍艦に搭せんとして偶々地に  
 倒る乃ち叫んで曰く「嗚呼阿母アルス(地を指す)余を迎へんと欲して  
 業に已に待つある乎」と士卒視て以て其能く晏如、海を渡つて復た  
 陸に上るの吉徴と爲す  
 ウヰリヤム王、初めて英國海岸に上陸するや誤つて躓き倒る士卒之  
 を危ぶみて安んぜず王双手各々一握の土を攫みて徐ろに身を起して  
 曰く「余英國を畧取すること應に此の如くなるべし英國の土壤今や

已に余の有に均し余唯だ進んで之を双手に攫取するあらんのみ」と

○壯なる少年兵

第一世那破翁、獨逸を攻撃せし時、獨逸にては殆んど千人の少年兵  
 自ら望んで出軍し勇壯なる働きをなし過半は屍を戰場に曝しぬ其中  
 には貴族の子弟さへもありき何れも大學中學より出で、戰場に臨み  
 たる中にはメシヤース、ステフエン及びヂエンの如き文人とし有名  
 なりし人も多く是等は大将となりて講堂にて教訓しつゝありし口よ  
 り命令を下したり各々心は逸れども平素軍事上の熟練とては更に無  
 く剩へ戦場の疲勞を堪へ得べしとも見ぬざる弱年多かりき現にツレ  
 スデンにては僅に十歳の小兒の目に涙を浮べながら其隊内に加へて  
 呉れよと歎願し銃を擔ふこと能ずば責て太鼓なりと打せ呉れよと云

ふに一同其餘りに弱少にて逆も太鼓打ちの職務を帯びんことも覺束  
なければとて停むれども聞入れず。猶ほ執念深くも加入を願ひたり  
又レプローにては同じ年齢の小兒が從軍せん爲めに脱走したりとて  
其兩親は新聞紙上に廣告して之を搜索したりといふ亦以て獨逸人の  
愛國心に富めるを窺ふに足る

○其荷を爾に與へん

アレキサンダー大王曾て一兵卒に命じ黄金の荷を負へる驃馬を  
つゝ大王の前を進行せしめぬ而して行くこと未だ幾ばくならざるに  
驃馬は黄金の重量に耐へ得ざるに至れり是に於て誠實なる彼の兵  
卒は勇しくも荷を驃背より下して自から之を擔ひ以て行進を續けた  
り而して歩むこと多時。流石剛壯なる彼の兵卒も漸くにして力屈し

蹠蹠として將に倒れんとす大王は之を觀て大聲之を勵して曰く「友  
よ屈する勿れ更に勇を鼓して其荷を爾の幕内に運べ余は其荷を爾に  
與へん」と

○諧諛暴民を鎮制す

第一世那破翁。軍務總監の重任に就きしより大に兵制を釐革し戎器  
糧餉を充實して以を不虞の用に備ふ爲めに人民常食の麵包甚だ闕  
乏し士民蜂起して暴動を爲すこと屢々なり或る日身体肥滿なる賣  
魚婦自ら主唱者となつて一揆を煽動し且つ揚言して曰く爛々たる軍  
帽を戴き燦然たる徽章を着ける癡漢（在朝者を指す）は恬として吾輩  
の苦情を眷顧することなし彼輩獨り滋味に飽せば吾輩飢饉を免れざ  
るなりと時に之を鎮制せんとして來れる那破翁は元來瘦せたる身体な

るに因り該婦に問ふて曰く爾の言甚だ善し敢て問ふ爾と余とは孰れか最も肥滿せるやと婦之に對ふる能はず竟に失笑しければ之が爲め暴民の怒も挫けて事鎮靜せり

○花瓶を地に抛つ

第一世那破翁會て各國の全權大使と會して佛國に對する講和の條約を結ばしめんとす時に澳國全權大使コベヌセルは條約の締結を破らんが爲め時機の變あるを俟ち故らに講和談判の條項を増し時日を遷延せんと欲す然れども那破翁の慧眼忽ち之を看破し一日自らコベヌセルを訪ひ怒れる狀貌を爲して座側の美なる花瓶を執り大喝して曰く……汝は講和條約の締結を欲せざる者の如し吾亦要求せざるなり然れども余は二月間に於て澳國を蹂躪すること宛も此器の如けん……

と言ひ終りて花瓶を地に抛ち戛然粉齏し席を蹴て去りしかば澳國大使も其威に辟易し速に條約締結を諾するに至れり之をカンブホルミヲの和約と云ふ而して該條約の締結に至るまでには那破翁の驕蹇傲慢なる舉動の迸發せしこと少なからず今其一斑を舉れば該條約書第一條に澳帝は佛國の共和政治たることを允諾することあるを見て大に愠りて曰く速に之を塗抹せよ其の明瞭なること日の大空に懸るが如し盲者にあらざるよりは復た此の如き贅文を要せざるなりと

○提督たらんことを欲す

提督ホーク年少の時、一兵卒を以て初めて軍艦に役務を執んとし父に面して暇を告ぐ父と彼が少壯血氣にして過ちあらんことを恐れ篤く將來を戒しめ且つ謂らく兒よ、我が親愛する兒よ我は老後の樂み

何者か之れあらん唯予は兒が今より奮勵拮据して異日船長たらんことを樂むのみと時にホークは儼然として之に答へて曰く何船長なるか父よ予は他日提督たらんことを欲す提督たる能はずと思惟せば予は豈に甘んじて事に之に従はん寧ろ放棄すべかりしと彼れ遂に其言に背かず

○軍艦の操轉臂の指を使ふが如し

幕末函館の海戦に榎本の部下松岡盤吉能く戦ひ軍艦を操轉すること宛も臂の指を使ふが如く加ふるに佛狼機を發し榴彈を放ち官艦長陽號の火藥庫を毀つ黒烟天に漲り響き百雷の一時に落るが如く忽ち艦体破壊し二分時間を歴て遂に沈没す此艦の載る所殆んど千人なるも死を免るゝ者僅に二十餘名、海陸の幕兵皆な拍手して快と呼ぶ官兵

遂に七重に敗走せしといふ

○一足の草鞋、萬戸侯に在る

十年の役、薩軍漸く敗衄して走るや山跡險峻加ふるに大雨盆を覆すが如く途上泥濘脚を没し或は岩角崖崑膝を傷けんとす爲めに草鞋悉く絶斷し衆皆徒跣して走る偶々破鞋の路傍にあるを見れば争ふて之を奪ふに至る時に佐々友房別に草鞋一足を準備して腰に纏ふ蓋し戦死の日に用ゐんと欲するなり然れども其友松野某の困苦を傍觀するに忍びず將に之を與へんとす松野信せず唯々戯るものと爲す友房之を強ること再三に及び始めて眞に與ふるの意たるを知り喜色滿面に溢れて曰く此賜もの實に萬戸侯に勝ると

○英國海軍士官の膽を奪ふ

威海衛陷落の後、我海軍士官は英國の軍艦を訪ひ該國士官と談話の際、偶々水雷艇の事に及ぶ我士官は英國士官に向て曰く今回の攻撃に於ける水雷艇の働きは未だ以て小なりとすべからず左れと惜むらくは敵艦深く港内に潜みて出ず我水雷艇の侵入すること愈々深ければ破等が逃廻ること愈々深く彼我相對して交戦したる事はたゞの一度もあらざりしかば爲めに戦術上に於ける面白き新例を作り出すこと多からざりしは實に口惜き限りなりし若し貴公の御國とやる如き時節來らんには其時こそ世界の戦史上に一層面白き戦術上の新例を遺して御覽に入るべければと言ひ放ちて哄然大笑す流石の英國士官も苦笑して只々默然たりしといふ

○桐野の壯圖

桐野利秋、陸軍少將として東京に在るの日、岩倉公に謁して征韓論の議を促す公利秋に謂て曰く西郷自ら朝鮮に行き卿等亦之に従はば誰れか我帝國を守るべき是故に征韓の事は可なり西郷自ら行くは不可なりと利秋之を難じて曰く堂々たる廟堂、濟々たる多士豈其人無しとせんや假令我輩砲火の中に斃るゝも吾志を繼ぐべきの士決して少なきを憂へざるなり公曰く我能く朝鮮を征すと雖も萬一露人にして朝鮮の後援と爲り我に抗せば我何を以てか之に當らんと利秋慨然として曰く露軍若し來らば我れ直ちに西伯利亞を衝き進んで聖彼得堡に長驅すべし露國何ぞ深く恐るゝに足らんと

○手足の如きは措むに足むず

戊辰の役、賊將河井繼之助、北越の兵を率ゐて官軍に抗す偶々流丸に中り負傷し病院に入る而して越兵の敗績するを聞き蹶然駕龍に乗り出で、兵士を指揮す傷愈々重し三間市之進を呼びて後事を托す會津侯之を憂へ大醫松本良順をして其傷を診察せしむ良順曰く病毒深く骨に徹す大切斷を施さざれば不可なりと河井曰く一命を保つを得ば復た事を成す易々たるのみ手足の如きは敢て問ふ所にあらずと因て會津に迎へて施術せんとしたるも途中に於て歿す是より越軍復た振はず

○剛柔兼備の將軍

戊辰の役、山縣狂介(今の陸軍大將)官軍の參謀として越後口に向ふ將に信濃川を渡らんとするも船なし偶々久住某船に乗つて上流より

下る狂介懇ろに其船を借んことを乞ふ久住之を肯かず狂介大喝一聲刀を案じて之を叱す久住恐怖して命を聞く後狂介内務大臣たる頃東京府下に惡疾流行せしかば其撲滅に際し各區長を招き響應す時に久住某も牛込區長たり竊に以爲く山縣内務大臣必ず昔時の如く狂暴の士ならんと既にして宴に赴き之に接するに溫柔にして宛も處女の如し久住其意外なるに感せしといふ

○工兵戰鬪力あり

川村中佐、工兵大隊長たり楊峰嶺砲臺攻撃の際中佐部下の工兵を率ゐて先登す戰後某外國武官之を聞き中佐に謂て曰く工兵の先登果して信なるかと大に之を疑ふものゝ如し中佐悠然として答へて曰く日本工兵は外國のと異なり戰鬪力を有せりと外國武官愧色あり

### ○六十六門の砲列

田庄臺の戦鬪に大砲六十六門を一線の砲列となして敵壘を砲撃す此の多數のものを砲兵部長黒田少將(久孝)一人の指揮の下に操縦せられたり是れ實に歐州と雖も稀有の事なりと云ふ黒田少將の砲術に精練なるを知るべし

### ○豪膽なる中村騎兵中尉

中島騎兵中尉は營口攻撃に關し重要なる道路、地形物資敵狀等偵察の任務を帯び十騎を率ゐて出發せり此斥候、老爺廟を経て一直線に後家油房に達せんとする時、油房に赤旗を認めたり然れども距離遠く其兵種兵力を審かにする能はず依て視察と警戒とを加へ前進せしに油房南方の一小村に於て潜伏せる敵兵に遭遇す敵は人家の内よ

り四十メートルの距離に於て中島中尉を狙撃せり其第一發は實に中尉の左腿骨を貫通せり而して敵は一時に人家より走り出て亂射を始めたなり其衆約ね二百人なりしかば中尉及び其部下の馬匹は驚いて狂奔せんとし中尉の左鐙の脱し上体を鞍上に動搖せり然れども中尉は此の彈丸雨注の間に在つて自若として更に動かす並歩にて一列に開けと號令し靜かに退却を始めたり敵は歩兵のことなれば急追すること能はざりし此間に中尉の潜かに傷部に外套を覆ひ部下をして知らしめず敵漸く遠ざかるや部下の者地上に血痕滴々たるを見て誰か馬を傷つけずやと絶叫せり中尉は直ちに之を呵責して再び之を言はしめず退却すること約一里半の後、中尉は始めて之を部下に告げ三角巾を以て繙帶を施さしめ急造擔架にて部下に送られ途中支那土人

を雇ひ約八里餘なる本隊に非常の困苦を以て歸來し直ちに病院に送  
られたり軍醫の診斷に依れば左大腿骨は全く折れたり中尉の大膽  
にして不意の變に驚かず彈丸雨飛の中に在つて熱心に偵察し終に其  
任務を果したりといふ

○戦の爲めに不吉の名なり

西南の役、薩軍田原阪接戰以來連敗して退くに際し佐々友房甲佐街  
道の守備に當る因て自ら近傍の地理を巡察し一山を指して其名を土  
民に問ふ彼れ答へて盜塚なりといふ友房又他の山を指して彼れは如  
何、土民曰く駒返嶺なり友房曰く然らば此れなるは如何、土民曰く  
白旗山なりと何れも戦の爲めに不吉の名なり友房憮然として去りし

と云ふ

○敵地の嶮峻何ぞ恐るゝに足らん

會津は要害の地最も多し就中下野より到る一路は狹隘にして且つ嶮  
峻なり因て戊辰の役には巨石大木を積みて之を守る時に桐野利秋官  
軍の隊長たり薩兵一隊を率ゐる因州兵と共に之に向ふ人々其地の嶮峻  
なるを見て躊躇す利秋之に處するの法を因州の隊長に問ふ然れども  
別に良策あるなし利秋奮然として曰く此期に及んで何をか談せん唯  
一時に奔過して敵を衝かんのみ因州の隊長曰く若し巨石大木を亂下  
せば我が兵粉砕せられんと利秋發憤眉をあげて曰く然らば余は我兵  
のみを以て之を行かん足下暫らく吾が爲す所を見よとて俄に進行の  
命を傳へ白刀を揮ふて自ら衆に率先して一直線に奔過す敵兵果して



巨石大木を投ずるも我兵に及ぶの暇なし利秋既に此隘路を通過し前面に當れる敵陣を衝く敵兵皆此要害あるに安しじて地上に銃を交叉して休憩せしも今此官軍の襲來に逢ひ一驚を喫して忽ち潰走す

○堡壘闖入の即智

百尺崖の攻撃數時にわたるも壘固ふして抜けず即ち突貫之に迫れば飛彈雨の如く而も壘壁險且つ高ふして攀づ可らず此時に當り一兵卒の上衣を脱て赤シャツ一枚となり飛んで壁に近く者ありしが忽ち銃身を壁に刺して段を作り劍を抜いて又一段を作り斯くて終に壁頂に登り上より一人宛を引き上げて堡壘に闖入し爲めに忽ち之を陥るゝに至れり此赤シャツ兵の當時の即智と其功績とに至りては一同感せぬ者は無かりしと云ふ

○二將校罪を争ふ

鳳林集附近の戦に意外の死傷を出したるが戦ひ了りて後江田少佐は本隊に歸るや涙を揮つて長官に陳ふるやう今日の死傷多きは小官が罪なりと其日の過失を一身に引受け罪を負はんとし居たる所へ福島聯隊長は進み出で、江田少佐を推止め否とよ开は江田少佐の罪にわらず全く小官の罪なりと互に血涙を濺いで其罪を争ひしといふ古來軍功を争ふ勇士の話は多く耳にする所なれど 罪を争ふの美談に至つては未だ嘗て聞かざる所なり

○西郷隆武の先見

西郷隆武(小兵衛)は老西郷の弟なり天資沈毅にして戦術人に過ぐ西南の役薩軍の中隊長たり初め隆盛の軍議を開くや隆武策を獻じて曰

く我軍を分ちて三道より進むべし蓋し熊本城は政府の雄鎮なり其司令官たる者焉ぞ之を堅守せざらんや因て一軍は之に當り他の一軍は日向より豊後豊前に出で沿海の形勝を扼し第三の軍は軍艦に乗つて直に長崎を襲ふべしと此計大に佳なりしも桐野利秋之を不可として曰く大軍應に國境に出づ宜しく正々堂々以て天下に縦横すべし奇兵を用ふるは義兵の名に愧づる所、且つ此行や吾れ敢て戦を挑むにあらず已むを得ずんば百姓原(鎮臺兵を指す)を驅け散さんのみと衆議終に之に同す隆武天を仰ぎ嘆じて曰く薩摩武士をして快よく一死を遂げしむる者は利秋なり薩摩武士をして終に一生を誤らしむるも亦利秋なりと

○君はお世辭が上手になつた

石黒軍醫總監九連城後の野戦病院を巡視したるとき遙に山椒を望めば二個人影あり望遠鏡をとつて之を見れば山縣大將が一卒を従へるなり急ぎ其跡に追付き共に携へて營に歸る食後大將を訪ふて快談數刻軍歌流行の事に及びぬ大將曰く余も亦一曲を作れりと總官に示し自ら讀み了りて又低聲に歌ふこと一回妙音節に合し尾々として聴くべし總官危坐して曰く閣下の三軍を叱咤するや洪聲雷電耳を蔽ふに違あらざるが如く而して微妙の聲は優に少女をも懐くべし雲時にして此九連の堅城を抜く洵に宜なるかなと大將之に答へて曰く「君は近頃大分れ世辭が上手になつた油断は出来ぬ」と云ひ了りて共に大笑深更に至りしといふ

○玄武門の先登

平壤の戦に玄武門堅くして碎けず三面に敵砲を受け我軍多く斃れ全軍爲に退かんとす小隊長三村中尉大に奮ひ自ら肉薄して城壘に攀ち内に入んとす此時一卒あり中尉に先じスラノと猿の如く障壁をなせる峻阪を走り上り中尉亦續いて入り玄武門をサツと押し開きたり斯と見て障壁の下に群がる我軍忽ち門内に闖入し、さしもに堅固と稱せられたる城の一面を破りたり不思議にも當時雨の如く注げる彈丸は此奇切を奏したる二氏に當らざりしといふ

○黒木將軍の慈愛

黒木將軍征清の際、從軍記者を見る毎に問て曰く不自由はなきやと自ら携帶せる煙草或は酒の半を分ちて之を與へらる部下の兵士を勞はる亦た此類なり將軍一日木澤副官を遣はして命を軍司令部に受け

しむ此日雪深ふして寒殊に甚だし夜四更の頃命を帯びて歸來すれば將軍尙は坐して之を待つ則ち戯れて曰く足下の勞苦想ふべし吾將に足下の爲めに香を炷して之を祭らんとせりと諧謔の中と雖も自ら部下を愛するの深情あり

○豪傑組

故別府少佐、士官學校の教官たりし時豪傑組なる團體を作り自ら其長となり常に少年軍人を集め豪傑的訓誡を垂れて切りに尊王尙武の精神を鼓舞したりき此豪傑組といふは己等が首に戴きて尊奉し其が爲めには水火をも厭はざるは皇室あるのみにして他は固より同等なるを以て恐る可からず數ふるに足らずとなし行住坐臥、決して足を宮城の方へ向けざることとなし又豪傑は寡黙ならざる可らずとて

人に相對するも手を拱き口を箝みて容易に談論せざるを常とせり然るに士官學校にて之を危険なる團體と見做し生徒が各團體を作るは不都合なりとて之を禁止せられしかば止むを得ず解散することゝなれりといふ

○戦地に在て尙ほ俳諧を弄す

原口淺次郎は日清の役召集されて戦地に臨みしが同人は常に風流を好み故夜雪庵の門に入り雅號を蘆雪と呼びたり砲烟彈雨の間にあるも尙ほ風流雅致の餘裕あつて左の俳諧を弄せしといふ

案外支那兵の弱ければ

出て見ればけつく暖し雪の中

いざゝらば雪見に轉ぶ所までとの先哲のいましめにはそむ

けと

轉ぶとも飽くまで見ばや雪景色

我軍の向ふ所敵なし

鷹の聲諸鳥は音を止めけり

○勇士の曲

三阪一等軍吏、浦部海軍大尉の両氏征清の際將に戦地に臨んとす交友十數名之が送別の宴を某亭に張る酒三行衆皆大白を擧げて皇軍の大捷を祝し併せて其行を送る興將に闌ならんとす三阪軍吏高聲に吟じて曰く「天津に行けば我身も勝軍」あゝ北京は今一呼吸の間に迫れど斯る酩酊イヤ此重傷にては覺束なし誰れか能く我を助けて北京城下の盟を爲さしむるものぞ脆くも援兵を乞ふ有様なるに更に

一人の軍吏あり我こそ其任に當らんと息巻けば浦部大尉是れぞ已れが適任なると三尺の秋水ならぬ三寸の管城子採るより早く攻つけんとするに軍吏は肯せず茲處は海軍の與る所にあらずとて「北京へきんと祝ふ嬉しさ」と續けたる聲聞て拍手の聲は四方に起り各萬歳を狂呼するに大尉は靜かに身を起し斯くまでの恥辱やはか雪がで置くべきやはといはぬばかりに「行きついて見れば此處にも花の山まよへばかすむ春の曙」と詠出す此時 天皇陛下萬歳、帝國萬歳、陸海軍萬歳の聲に満座震はんばかりなりし

### ○大山大將の慈愛

旅順大に雨ふり盆を覆すが如き折柄、大山大將、俘虜の軒下に在るを見て彼も人の子なり余が馬は雨中に立たしめ死すとも悔なし速に

彼等を余が廐に入れよと云ひしに俘虜之を聞き皆な涙を流して其恩を謝せりと是心あり以て百萬の貔貅に將たるべし

### ○山口將軍の剛膽

征清の役、山口將軍は張家口子を出發して前亭村の右なる小丘に上り始終威海衛の戰鬥に意を注ぎ又小泉副官に軍略命令を傳へ居たり傍に在る者は我國二三の從軍記者倫敦タイムズ、桑港クロニクル新聞記者等なりき折しも敵の隊より打出せし彈丸轟然として將軍の頭上二三尺の所を通過し後方三四間の所に爆然として落下したり此有様にクロニクル記者は周章狼狽逃んとして足度を失ひ六尺の大男がコロくと高丘より轉墜せし様、可笑くも亦た氣の毒なりしが此時將軍は唯だ悠然として微笑するのみ一敵が此處へ目標を付けて又打

つかも知れんから皆なは早く此場を去るがい」と言ひつゝ靜に起  
て彼のクロニクル記者を右手を以て引起したり

### ○大膽不敵の兵士

草河城の戦に我偵察部隊は進みて敵に接近し其散兵線に着くや敵は  
前面左右に展開して我に猛烈なる十字火を集注し來り負傷する者多  
し折しも敵の砲彈は轟然一發我陣地に爆烈して聲天地に震ふ高木上  
等兵此爆烟と飛塵とに包まれて行く所を知らず。あはれ血肉亂飛し  
身体粉塵せるなるべしと衆皆な爲めに氏を悼むの時硝烟爆々の中。  
一聲爽快にエー畜生と徐かに軍袍の土砂を拂ひ落し手巾を以て面を  
拭ひつゝ泰然屹立して彈片の身に觸るゝなく莞爾として衆を顧みし  
は大膽不敵の人と謂ふべし

### ○ヤンレー節

金州附近に滯陣中の兵士某氏は月明らかに風寒からぬ夕、舍外を散  
歩しつゝ情の動く處口に任せてヤンレー節を唄ひ出てたるに句々悲壯  
節々凄烈自ら是れ絶調のものと言ふ可し曰く

鋏を持つ手に鐵砲持て、花の仙臺出たのは去年、永の逗留廣島街  
で、欠伸交りの小言も出たが、臆て船出は宇品の港、之が故郷の  
見納なるぞ、船の中から首さし出せば、烟のやうだが山々の影、  
どうせ死ぬのに何要るものか、さんさしぐれを唄て死ねや、骨と  
髪とか故郷に行かば、家で嗅めが鼻高かんべ、サーサやれ〜一  
齊射撃、面倒臭いや吶喊攻撃、彈は霰と飛んでは來たが、何の因  
果か中つてくれず、露營舎營風さへひかず、豚と芋とで豚のやう

に肥れた。ゆんべ鼻から手紙が届いた。家の畔は學校通ひ。村の娘子が嫁に行た。鐵葉喇叭を五錢で買て。次男は毎日喇叭ふく。吹た喇叭を夢に見て。今朝の喇叭で目がさめたヤンレー。目がさめたヤンレー。

○養氣の都々逸

脇部春次氏(歩兵第十六聯隊第二大隊附)が金州曹家屯に在陣中英氣を養ふ爲めとて作りたる都々逸あり曰く

身には荒蕪着やうとまよよ名酒大勝利菰かぶり  
 英雄豪傑かゝみと立て、櫛風沐雨のあら化粧  
 忠臣義士をば手本とながめ四百餘州の双子紙  
 彈丸でれ主の命を取つて屍はわたしのかり枕

星の數はと豚ある中に月と見るのは丁汝昌  
 梅の蕾と日清媾和ひらかぬ間が樂もしい  
 忠君愛國知らない民が勝つて建てたる國はない  
 北京かつひて天津さげて英吉利あたりへ逃しやんせ

○福原將軍の豪放

福原將軍は磊落不羈にして敢て邊幅を修せず全郷の學生等が訪問するときにも玄關より「頼む」「御免下さい」など、儀式張て案内を乞へば留守をつかいて面會せざるも臺處より這入つて「今日は御馳走を頂きに参りました」など淡泊にいふて來るときは將軍は大に喜び左らば上れと直に居間に通して快談時の移るを知らざるは必なりし又將軍常に粗末なる衣服を着し宛然たる老書生の風姿にて不意に同

郷の學生等の下宿屋を訪ひ穢ろしき四疊半の内に豪放快活なる談笑を逞しうするは敢て珍しからざりしと

○鼻唄をうたひつゝ突貫す

西旅團長は部下の兵を率ゐて椅子山砲臺を攻撃せんとて全軍我れ先きにと勇を鼓して進みし程に早くも椅子山砲臺を距る三千メートル(凡廿七丁餘)の地に達せしかば斯くと見るより敵兵は今更の如く周章狼狽して俄にドン／＼砲臺より大砲小銃を亂發せり左れど我軍は假令三千メートルの處より射撃するも到底充分に的中の見込なければ更に之にも取り合はず更に一齊進軍の令下り孰れも銃を肩に掛け或は背に負ひ様々の掛け聲勇ましく勇氣凜々として進む有様は眼前に敵兵のある跡とは見ぬを孰れも行軍同様の心持にて或は輕口をい

ふもあり或は鼻唄を唄うもある其中に松崎軍曹はフト心に浮びしま

「敵を待ちつゝチャン／＼が、鐘太鼓。叩いて逃げ出す意氣地な  
さ。コチャ追ひ掛ける」

と「お前を待ち／＼の」替へ唄を即興のまゝ聲高やかに唄ひし處。前後左右の人々ドット一度に大笑ひをなし餘りの可笑さに續いてワァーイと突貫の聲を發せしが何と思ひけん其前頭に進みし諸隊も之に和して同じく呐喊の聲を發せしにぞ其聲に響きて山岳を震動するばかりなりしが椅子山砲臺の敵兵は偕てこそ日本兵は例の突貫にて押し寄せたりとや思ひけん皆な先きを争ふて退却を始めしかば「スワ」支那兵が逃るワと云ふ程こそあれ今度は眞の突貫をなして砲臺



上に登り見たるに敵兵は尙ほ右往左往に前面の入口より石段を駈け下り顛げつ轉びつ黄金山を指して逃げ行く様は實に無類の見ものなりしといふ

○軍人中の奇傑

征清の役、武田大佐、連戦連捷の後凱旋軍に殿して歸朝の途に就けり家人之を門に迎へ兒童、嚴父に絶りて支那土産を問ふ大佐一個の革囊中を指して曰く土産は彼れに在り永く保存して汝等の紀念とせよと兒童集まつて恭しく革囊を披らさ見れば二三の土人形出でたり兒童呆然として嚴父の顔を見るのみ大佐之を戒めて曰く仁師蠻族を征す何の土産か之れあらん兒童に與へし所の土産は敵國を降伏せし紀念の爲めに持歸りしなり余が兒童に與ふる所の土産としては之に過

ぎたるものなく兒として汝の父より受くる土産も亦之に優るものなけんと家人大佐の歸朝を聞き大佐の居間なりとも疊換へを爲さんものと其準備を爲し居たり大佐之を戒めて曰く萬里の懸軍具に辛酸を嘗め子を失ふ老婦あり父に別るゝ孤兒あり身大佐の重職を汚すもの豈に青疊の上に起臥し士卒の愁を傍觀すべけんや又家人の留守を護り兒童を教ふるの餘暇、下婢を相手に蠶を飼ひ獲る所の繭を以て大佐に呈す大佐問ふて曰く何の爲めに蠶を飼ひしや家人色を正うして曰く良人の引率し玉ふ部下兵士の遺族を救はんが爲めなりと大佐大に喜んで曰く之れある哉余をして意を強ふせしむと大佐の平生大概此の如し軍人中の奇傑なるかな

○銀色の腕環

明治七年西郷將軍臺灣征討軍の都督として同島に渡られたる際、生蕃は始終支那人を敵視し居たるものなるが故に日本の征臺軍同島に渡ると聞くや生蕃の酋長始め同蕃族は私かに日本軍の來征を悦び饗食壺漿して我が征討軍を迎へ大に我が軍を歡待し其酋長は親しく西郷將軍に面接し將軍も亦た最も懇ろに之を慰撫せしに酋長の大に我帝國の德に感じ我征討軍の凱旋するに當り更に後年の紀念として一個の銀色腕環を贈呈せり因て將軍は常に左の手首に嵌めず時も除きたることなしと

○壯烈剛勇なる一老將

千六百九十六年佛國兵亞米利加の土蠻を加那陀に襲ふて之を逐ふ此役土蠻中に一個の老勇將あり禿髮豁齒年己に一百歳を越ゆと雖も尙

は鬻鏢健剛 壯者も及ばず其衆潰走するや彼獨り止つて奮闘し遂に佛兵の生擒する所となる佛兵乃ち之を土蠻の前に降れる者にす彼等固より暴逆 亂笞酷踏殆んど至らざる所なし然れども老將自若として一嗟嘆だも爲さず却て彼等の歐人に使役せらるゝの醜を罵倒して已ます一土蠻怒つて之を斬ること再三鮮血淋漓として地に浴し老將。土蠻を睨み叱咤して曰く「奸賊何をか爲す大丈夫の最後如何に壯烈剛勇なる を見んと欲せば汝更に大に努力せざる可らず」と

○老父怯兒に代つて軍に投ず

一老兵ありシヨリボイスと云ふ其子兵士となつて巴里に在りしが偶々遁逃して行く所を知らずシヨリボイス其子の怯懦にして我家名を汚せしを怒り遂に自ら其欠を補充せんと欲し蹶起軍に投じジエムア

ツプの役、奮戦して大に功あり其銃を放つや毎に必ず切齒憤慨して曰く「咄、汝、怯兒一たび汝の事に思ひ到れば壯快今の如きと雖も尙は且つ遺憾慚愧に堪へず」と

○アルマンゾル將軍の智謀

西班牙及びムーアの戦争に於てムーア軍の司令官は智謀の名あるアルマンゾル將軍なりき交戦の酣なるや彼た部下の兵士は卑怯にも逃走せんとせり將軍大に之を憂へ突然地上に座し手を十字に組み兵士に告げて曰く予は此處に死を待ん汝等は予を棄てて逃れんとする故に予と切に此處に死するを願ふと兵士等此言を聞くや衆皆な悔悟の色を呈じ等しく將軍の足下に拜跪し只管其罪を謝し死を以て之に報ひんと誓ふ是より軍氣奮ひ諸所に西班牙人を撃破し遂に大勝を

得たりとなん兵に將たる者も亦た難い哉

○愛國心の結晶變体

北米獨立の戦争に於て最も愛國の衷情を表せしはプトナム將軍なり時しも紀元千七百七十五年レキシントンに於て開戦せりとの報プトナム將軍の許に達するや將軍は偶々コンチカット州プロックリンの田野を耕作しつゝありけるが愛國心の結晶變体なる彼は此報を得るや直ちに伴ふ所の家畜を放ち携ふ所の鋤犁を棄て田畦に屹立せしと見ゆしが垢衣のまま馳せてポストン附近に於ける交戦中に軍隊に投せり彼の軍隊に達するや彼は中將の重官を拜し銳意軍隊を指揮して遂に功を奏せり戦の終るや全軍の大將ワシントンは將軍の戦功につき最も眞摯に最も慇懃に敬意を示して曰く我敬愛する卿よ

卿の芳名は千載不朽に存せん吾人が満身の熱血を瀉ぎ勞工と辛苦とを擧げて吾人の自由と權利とを争ひ遂に邦國の獨立を完ふせし光輝と共に卿の芳名と萬世に傳はらんと嗚呼人の此世に生るゝや誰か愛國の心なからん然れどもプトナム將軍の如きは蓋し異數中の異數なるものなり

○武勇を重んず

紀元一千六百九十四年英佛戦を開くの時カピテンキルリグウ軍艦に搭じて敵の所在を偵察す偶々佛の軍艦コンテント號に會ふ敵艦の水兵、今正に天を拜して祈禱に餘念なく毫も我艦の來るを知らざるものゝ如し艦員皆な曰く「機乗すべし請ふ一撃の下に破らん」と艦長肯ずして曰く「此の如き機會に乗じて敵兵を襲ふは英國男兒の武

勇を辱しむる所以なり」とキルリグウ終に力戦し死せりといふ

○人心のやすまるが程度

人あり井上將軍を訪ひ談偶々軍備擴張の事に及ぶ客曰く其程度につき敢て將軍の高見を聞くことを得んと將軍曰く人の心が安まる程度にて宜し譬へば加藤清正は重ひ甲冑を帶して安心し加藤嘉明は輕い甲冑にて安心したるが如しと蓋し旨言と謂ふべし

○佩劍に刃を付せざ

澎湖島の候角砲臺陥落の際、先登の榮譽を荷ひたる本下大尉（今の少佐）城内の露營に在りし時、人あり大尉を訪ひ當日の戦況を談ず談偶々軍器の事に及ぶや大尉語て曰く往年余は故山田顯義伯と士官の佩劍に就きて論せしことあり余は實戦に用ふる時は銳利なる刀劍

の利なるを主張しけるに伯曰く否とよ佩劍は單に士卒を指揮せるに止まるものなれば必ずしも其利鈍を要せずと余之に服せず大に論議する所ありしも言遂に屈したるを以て伯の意に隨ひ今に至るまで尙は佩劍に刀を付けず乞ふ之を一見せよと鞘を拂ひしに通常兵士の佩劍に比して稍や長きのみ大尉は更に戦時、靴と草鞋との優劣に就いても伯と論せし事ありしが數度の戦に經驗する所によれば靴の方遙に安全なり云々

○那破翁の雄志

第一世那破翁少壯の時、巴里の兵營より暇を乞ひ母を省る爲め故郷のコルシカ島に歸りしが當時島民は、英國と聯合し佛國共和政府に抗敵する際なりき島司ボウリーは豫て那破翁の才畧あるを知り之を

説て麾下に附隨せんことを勸む那破翁竊に以爲くコルシカ島は掌大の地なるに依り敢て獨立の邦國と爲すに足らず到底英佛孰れにか隸屬すべきの地たり是を以て考ふれば他日我が驥足を伸すの望みは却て佛國に與するに在りとして斷然島司の請求を謝絶し佛將の旗下に屬し護國兵一大隊を率ゐてアジャシオ附近の堡寨一攻撃し之に據守せしが幾ばくもなく英兵の爲めに圍まれ防禦備さに至ると雖も如何せん糧食欠乏を告げ終に馬肉すら食ひ盡し進退維れ谷るの域に陥り已むを得ず堡寨を棄て、巴里に退却す其狀毫も故郷の地に眷戀たる迹なかりしと云ふ

○首を垂れよ

征清の我役、兵楊峰嶺の砲臺を奪ふや敵艦其火力を集めて之に注下

す大寺將軍戯れに士卒に謂て曰く彈丸飛來するときは首を垂れよと  
蓋し其意は之に反するなり士卒解せず彈丸雨下すれば輒ら首を垂れ  
宛も禮を爲すが如くす將軍哄笑す

○懷量裕なる將軍

明治廿八年の一月元旦に近衛の服を着けたる兵士五人當時農商務大  
臣榎木子の官邸に入り來り我々は紀州出身の後備召集兵なるが何卒  
大臣に拜謁を得たしと申し込みたり取次ぎの人言ひ繕るひて体能く  
返さんとすれども請ふて止まず唯大臣の尊顔を拜すれば足れりとして  
更に歸らん模様なきに如何はせんと恐るゝ取次ぎるけに榎本子は  
今しも參内の準備成りて身に纏ふ海軍中將の大禮服金光燦然四邊眩  
く見へけるが、それと聞きて此れへ通せよと快く兵士を延見し冷

酒を振舞ひて懇ろに諭しけるは近頃兵士の中に往々品行の宜しから  
ぬものあるよし聞き及びぬ君等は是れ國家の干城として無限の榮譽  
を擔ふのみか恰も軍事多端の折に接すれば折角慎みに慎みを加ふべ  
きなりと告げゝるに之を聽きたる兵士の一人突然起て陸奥大臣萬歳  
と叫び出しぬ榎本子は余は陸奥大臣にあらず榎本なりと言はれしか  
ば他の一人如才なき駄にて彼の十七年の亂に際して閣下御出發の節  
大阪にて拜眉の榮を得たりと語り出しぬ子爵打ち消して丹は余にあ  
らず他人なるべしといひければ兵士は今更に色蒼白め身を顫はして  
仰きも得ざりけるを子爵最と氣の毒がりて撫鬚しつゝ微笑しつゝ世  
に人間違ひはあるものよ氣に懸くるに及ばずと慰めて更に給仕をし  
て酌を取らしめ兵士と相對して茲に新年の第一杯を舉げゝるに五人

の兵士流石は子爵が 懐量の裕かなるに服し更に榎本大臣萬歳を三呼して引取りたりといふ

○忠烈に抵抗し難し

カスタイルの王サンクチャスの時、黑人等タリファ市を攻圍するに當り此市の太守アルフホンミス、ダズマンの一子敵の手中に落ちたり敵は之を奇貨として城壁の前に其子を引出し太守速に出で、降らざれば此子を惨殺すべしと言へり守備兵どもは皆な此有様を見て何れも心を動されぬ然るに太守は自若として更に動する色なく自ら壁上に進み出で敵に向て大聲に喚んで曰く一人の子は愚か縦令我に百人の子ありて 悉く奴等が手中に落つとも我君に盡す忠義の心は少しも動かさじ奴等左程までに血を好まば茲に一劍を送らんとて壁上

より劍を投げやり扱て城壁を退きて悠然將に午餐の席に就かんとする時しも城内俄かに騒ぎ動揺めくにぞ太守は急に立返りて何事なるかと問へば士卒等孰づれも涙ながら今や令息は無慘なる死を遂げられたりと告ぐるに太守は聞き終り顔色更に變せず騒がしきは夫れ故か我は又敵が市内へでも進入せしかと思ひて心配したりと答へて、さあらぬ体にて再び食卓の前に座せり此の如く決心せる太守の忠烈に敵も抵抗し難しと思ひしにや漸く圍を解きて退きたりしといふ

○長谷川將軍の替歌

旅順の城塞に在つて朝に暄々たる山野の氷雪を望み夕に夔々たる波濤を聽て英氣を養ひつゝありし長谷川將軍は同地の滞在六十餘日の長きに渡れば無聊の餘り左の替歌を作れり

「我がものゝ作替」

露の身と思へば輕し我命、旭の御旗を保護して暫し旅順の冬籠り  
寒月高し喇叭の音、待身に春の進撃は、ほんに愉快じやないかい  
な

「宮さんくゝの替歌」

李爺さんくゝ、大事な戦ひ旅順の敗報さかないか、トコ狼狽シナ  
サンナ」アレはね茶の子、北京城下に旭旗の建つのを知らねいか  
トコ豚尾の意氣地なし

○ソラ草鞋が出来た

近井與利治氏は西大尉の從卒なり征清の役敵旗十數旒一面山頂に現  
るや西大尉の引卒軍弱を示して定軍山陰に伏す中に自語する者あり

「草鞋が出来たソラ又出来た」と大尉訝りて願れば己が從卒なり  
其意を問へば旗一本で草鞋が五六足出来ますと近井氏は平素沈黙に  
して諧諷を好むものにあらす而して突然此奇言を發するものは彼が  
眼中已に清兵なければなり

○判じ物

和泉、濟遠の両艦内に豊島の海戦、一周年の祝捷宴會を開きし際  
其餘興として左の如き面白き判じ物を駢列せり

- |        |          |       |
|--------|----------|-------|
| 斧と豆腐   | 昔し有名の漢學者 | 小野道風  |
| 錦の風呂敷  | 凱旋軍人の一願  | 錦衣歸郷  |
| 蠅と木    | 北洋艦隊     | 敗北    |
| 一錢銅貨九個 | 赤城艦の功名   | 黄海の苦戰 |



砥石と角燈

日清開戦の原因

東學黨

角砥と金碗

李鴻章の歎聲

兎角叫はん

寶刀と一錢貨

北洋艦隊滅亡の原因

豊島の一戦

棒と太鼓

文王謂濱の拾物

太公望

矢的、彈丸四

神州の特質

大和魂

白旗一本

清軍生命保険の章

降伏

梨と鐵器

吾軍の向ふ所

敵なし

○敵の腹中に在る糧を奪ふ

石田三成の臣に伊藤至孝なる者あり年十六七歳の頃より勳功ありて常に好んで赤き手拭はて鉢巻をなしければ敵之を見て又例の赤手拭こそ出でたれとて人々恐怖しけるが或る時味方戦ひ敗れ至孝一人衆

に後れて河岸を退却しけるが數時間の戦闘、殊に敗軍の事とて糧食の準備も皆な失ひ飢れども食するものなく頗る困難を極めける折から遙に一人の敵あり腰なる糧食を取り出して食ひつゝあるを見て至孝は是れ天の賜と打ち喜び疾走して之を斬殺し其腹部を割いて今食せし所の飯を掴み出し河水に浸し之を洗ふて以て打ち喰ひ我腹を肥して後ち静々と陣營に立ち歸りしといふ

○勇壯なる將軍

ミンデンの戦役佛國の陸軍大將ペラーの率ゆる精兵一隊は正面に敵の砲隊に向ふて進軍したるが爲め砲彈に當りて斃るゝ者數知れず士卒等稍や躊躇の色見せしかばペラー將軍は之を勵さんと自ら眞前に進み出で自若として喫烟しながら「何で皆な遠巡するのだ……ナ

ンダ大砲！それが何うした……弾丸に當れば死ぬるまでの事だ。それから上の事は無い何も恐るゝには足りない進めく！」と

### ○一劍を購んが爲めに家財を抛つ

桐野利秋壯年の頃家貧なり自ら耒耨を執り出で、田圃に勞働す一日隣人某一刀を提げて其傍らを過ぐるあり利秋之を呼び其故を問ふ隣人答へて曰く某氏に賣與するが爲め携へ往くなり利秋之を一見せんことを乞ふ隣人曰く刀の名作たるのみならず之を装ふに金銀を以てす士太夫以上の用ゆる所なりと暗に利秋等に不相應なるを示す利秋強て止まず隣人終に拒むに由なく之を授けて曰く濫りに瀆すこと勿れと利秋取て暫らく之を凝視せしが忽ち之を抜きて揮ふこと數回快なる哉くくと呼ぶ隣人其泥手を以て白の鞆糸を汚したるを責

む利秋曰く余未だ曾て此の如き名刀を手にし事なし既に之を手にす焉ぞ一揮を試みざるを得ん忽ち又之を揮ふ何ぞ他人の手に付す可けんやと終に家財を賣却して之を購ふ

### ○士官の快濶騎兵の天真爛漫

英國の陸軍士官フネールド、マーシアル、フレタグが佛の一騎兵に出逢ひて俘虜となりし時其騎兵は士官が立派なる懷中時計を有するを知り其時計を吾に與へよと云ふ俘虜なる士官は直ちに諾して之を騎兵に與へたり後ち英の將軍ワルモンデン來り救ひて彼の士官を取戻し其騎兵を俘虜となせり其時、騎兵は懷中より例の時計を取出し今は我運拙なくなれば時計は元の主人なる御身に返すべし本來御身の品なるを兵卒どもの手に掛り分捕らしむること思ひも寄らずとて

士官に渡さんとする其手を押へ其心配無用なり余は此品をば永く御身に與ふべければ此品の持主こそ一度は我俘となりしとの紀念とせらるべしとて受取らず時計は其儘此俘虜の手に歸したり騎兵の天真爛熳たる士官の快濶なる傳へて一双の美談と爲すに足る

○船中の不文憲法

收容軍艦鎮遠の回航委員を命ぜられたる海軍士官十四五名吳軍港より佐世保軍港へ向んとするとき坂本大尉は一の不文憲法を制定し衆の同意を経て發表せり

一此行旅宿若くは酒樓其他に於てメイド(樓婢)に持てたものには其勘定を負擔せしむる事

一同じくメイドに背中を敲かれたるものには其茶代を負擔せしむ

る事

一藝妓に持たるものには飲食の勘定は勿論玉祝儀をも負擔せしむる

事

一同じく藝妓に背中を敲かれたるものには單に玉及び祝儀を負擔せしむる事

斯くて一行は瀛船に便乗して吳を發し頓て宇品に着しけるに紳士体の男が藝妓及び青衣を伴れて乗込めるあり士官の一人手を拍て天女の御來降と叫べば又一人憲法中の危險物到來と笑ひさゝめく中には何とかして其天女に近づくべき掛橋もがなと思案の折柄端なくも上甲板にて紳士と顔を合せぬ心早き一士官は早や紳士に話しかけ彼れが旅順にて酒保を開き一夜大盡となりしことをも聞取れり偕て晩の

六時頃より我々の室にて酒宴を開くべければ御來會下されたし別て御同伴のものを連れなされて我々の興を添へて玉はるまじきかと云へば彼は早速承諾の旨を答へ其時刻となるや藝妓もろとも酒宴の席に來りけるが紳士招待は付けたりなり實は美人誘き出しの計畧圖に當つて一回の恐悅斜めならず戰捷の餘勇勃々として十四五人は直ちに一美人を取圍み廻るはく美人の髪のものより評價し始めて、唇の細大に及び頬の色より鼻の行儀を叱咤し來りぬ一人二人は防ぎも付けしも十數の銳鋒の簇り刺すを如何で堪ゆべき流石に閉口し降参して後ろを向けば其處に丹波少機關士ありおや貴君はお見掛申したお方といへば少機關士も亦成程見覺へありといふ何處でした子と美人は茲に隱家を求め少機關士の方に膝を直して兩人が對話の持

てるので他の士官は鼻を明しぬ同時に今宵のPAY(勘定)は丹波にせよとの聲々萬雷の如く響き渡られり

○代議士冷かさる

征清の役。對外硬派に属する某代議士戰地視察として從軍し先づ柳樹屯に上陸して兵站監部を訪ふ參謀官出で、面會し未だ初對面の挨拶も終らざるに突然代議士に謂て曰く「善くた出になりました。マア砲臺でも御覽なさい。支那には國會がありませんから。中々立派な砲臺があります」と代議士惘然答ふる所を知らず

○老西郷の遠謀

西南の役。西郷隆盛一萬五千の兵を率ゐて三太郎峠に到る斥候歸り報じて曰く嶺には一人の官兵もあらず速に踰ゆべしと隆盛大笑して

曰く鎮臺兵の技量も是れにて察せらる彼等の與し易きも亦知るべきのみ吾れ一たび此嶺を躡へなば敵を破ること破行の如けん今にして之を思へば一萬五千の兵も多きに過ぎたり因て佐土原より従ひ來りし者は歸り去るべしとて老兵數十人を無理に説き勸めて歸らしむ既にして郷里に歸りし者嘖々として西郷の壯言を説く之が爲め從來躊躇せし者も亦争ひて従軍せんことを欲し日夜續々西郷の迹を逐ふて起つ何ぞ圖らん其斥候のいふ所は豫め西郷の授くる所ならんとは

○日本人種なる墨國の名將

方今墨西哥國に於て著名なるトレントノ將軍は實に日本の人種にして其容貌骨格の上より推察するも殆んど争ふ可からざるの事實なり始め將軍の實父は日本の故山を去つて其愛兒と共に布哇に航せんと

する時偶々颶風吹き起りて將に魚腹に葬られんとしたりしが圖らずも墨國西部の沿岸に漂着して九死の上に一死を得たり然れども言語通せず幾多の艱難辛苦を経て遂に理髮店を開きて僅かに生活を立て居りぬ兒長するに及んで才氣人に秀で父に請ふて兵學校に入りしが父は貧苦の中にも兒の教育を怠らず其立身出世の日を指折り數へて樂み居たる甲斐もなく一朝病魔の冒す所となつて獨り愛兒を便りなき逆旅に残して果敢なくなりき兒は今や全く天涯の孤客となれども屈せず撓まず勉學しければ後ち數十度の戦争に偉功を立て、少將にまで累進しフロリスコ州の知事に撰擧せられ良二千石の芳名を博したり任期満るや復た撰擧せらる人民の信任の厚き密知すべし既にして一朝感する所あり第二の故郷ブーダラフラに隱遁して餘生を送り

つゝありと將軍の父は元是れ錢屋五兵衛の一族にして始め南洋に航し屢々布哇に往來したることありと

○バルフバート將軍の忠勇

埃佛戰爭の時、佛國にては戰鬪中負傷者を救護する爲めに隊列を乱だすことを嚴禁するの命令を下しぬ程なく兩軍戰を交へ數多の負傷者を生せし中に大將バルフバートも亦其一人にて砲彈の爲めに腿を傷けられて打倒れぬ其部下の一兵士は斯くと見るより急に寄りて扶け起さんとするをバルフバート將軍は手を振りて押止め一進めく我を扶けんと止る勿れ汝は今日の命令を守らざるか勝利を得て後に我を扶けよ」と叫びぬ後に至りて氏は陣營に伴なひ歸られしが重傷なりしが爲め終に死したり終焉に臨みて皇帝に宛たる一書を

草して曰く「一時間の中に臣は最早世にあらざるべし茲に勝利を得たるが爲め陛下が御代安らげく知るしめさんと思へば臣は死して更に恨なし陛下若し忠勇の働きをなせし者等を思し召し出でらるゝ時はバルフバートの事も忘れ玉はざらんことを願ふ」と

○帝國の海軍々人なり

柴山海軍中將と資性沈毅にして温醇なり平居言笑寡く絶えて快語壯行を以て自ら喜ぶの風なし去る廿六年海軍大改革を行ふや君を知る者皆な其榮進を期り然るに兵學校長となるに過ぎざりしなり人あり君に戯れて曰く「君は薩州の出身にあらざるか」と蓋し君は薩摩の門閥にして且つ海軍の技術に精通し夙に將官の候補として許されたるにも拘らず屢々其撰に漏れたるを以てなり君笑ふて曰く「余は薩人

にあらずして實に帝國の海軍々人なり」と眞に然り君の薩人に似ざるは獨り其海軍に於ける境遇のみにあらずして君の風采も亦薩南の健兒に異なるなり此一言以て君の人物如何に高尚に如何に嚴正なるかを表白するに足る

### ○自ら任すること深し

兒玉將軍天性剛毅。軀幹大ならずと雖も炯々たる眼光は一見して卓抜機警智畧に富めるを知るに足る征清の役某師團渡清の途に上れる時。將軍之を青山停車場に送り某將官に別れを告げ笑つて曰く「僕も同行したいが御留守番が當つたから旦那に心配をかけないやうに細君の務を盡しませう」是れ一時の戲謔に過ぎずと雖ども亦以て自ら任するの深さを知る可し

### ○剛膽なる將軍

故大寺將軍。青年の時一兵卒として初めて河島醇山本權兵衛等の諸氏と京都に入る其際淀の川船にて霜夜に逢の上に寢入たるは其將野津鎮雄氏に非凡なる人物として愛せらるゝの始めなり夫より伏見鳥羽の乱に一夜竹山にて一戦せし時。敵丸の竹山に入る音凄まじき中を將軍第一番に進み銃を枕にして寝ねたり人あり搖り起せば夜中敵の見ゆるに鐵砲をうてばとて何の効かあらん敵の濫りに發砲するは畢。竟臆病なるが爲めのみ我は天明を待つて敵兵を認むるにあらずれば無益の玉は決して一發たりとも發せざるべしとて以前にまして射聲高し又西南の役。馬上高く叫んで馬鹿どもが煙を見てヨケぬから怪我をしたり死んだりするのだ」といひつゝ縦横馳驅以て兵を

指揮しつゝありとか敵の飛丸右の耳をかすむ「ヤア大寺猫様ン射られやつた」と將軍が前言を聞ける人々笑はんばかりなりしが、さりとて煙を見て避けたるが爲め僅かに耳をかすられしのみにて濟みたり然らざれば額に當りし玉なりしを又會て大阪第四師團に聯隊長たりし頃、一日在阪の將校、江畔の某樓に相會して宴を開く中に金巾の粗服を着したる者あり陪宴の藝妓皆な田舎漢として輕蔑す然るに將校等皆な其前に平身低頭して大に之を敬ふを見始めて聯隊長たるを覺り俄に其側に來りて諂を呈したりといふ

### ○山澤將軍の勇武

山澤將軍明治十年の頃歐洲に遊び露國に在り偶々露土兩國戰を交ゆ將軍隨つて露軍に入る一日某野の大戦に猛勇無前の聞ゆる露國の

コサツク騎兵も土軍が激烈の砲撃に敵し兼ね流石の大軍も退却せり將軍之を見て一鞭を馬臀に加へ本營に驅入つて大將に見へて曰く騎兵一大隊を借し玉はずや今彼處に競ひ來る敵の歩隊を蹴破て貴覽に入るべしと大將「諾す」の一言以て某大隊の長と爲す將軍大に喜び馬を大隊の前に立て日本帝國の武士が手並を見するは此時なりと今しも破竹の勢を以て押寄せ來る土軍に向ひ「進め」の一號令を下し數百のコサツク騎兵をして敵中に突入せしむ敵兵此勢に辟易し少しく退却す將軍尙も進撃の令を傳へ無二無三に驅け立つれば其他の露軍始て之に力を得て騎兵は蹄を立て直し砲兵は砲門を廻らし數萬の大軍一時に盛り返して戦ひければ此日の戦の終に露國の大勝に歸したり事露帝に聞へ叡感斜ならず事平くの後、宮廷に召さる將軍御前に



出づれば皇帝龍顏殊に麗はしく山澤君と呼びかけ玉ひ歐洲の禮式語なる佛語にて君が露西亞帝國の爲めに顯したる殊勳を賞し露國勳等の第何等に叙し勳章を賜ふものなりと仰せられ御手づから授けられたり將軍一代の面目を施し進みて恭しく之を載き同じく佛語もて「メルシー」即ち（恭し）と答奏せんとしたりしが是を如何に確と「メルシー」を忘れたり咄嗟の間如何に案ずるも其語出でず儘よ間違ひたりとて黙して退かんには勝らんと佛語にて「バルドン！」（御免あれ）との一語を放てば流石沈深なる皇帝も笑顔を開かせられ並ひ居る侍衛の文武官も一時にドット笑ひ出し却て將軍が直率にして武人の本色を失はざるに感動し是よりバルドン佐官の名はセント・ロビータースバルグの軍人社會に誰知らぬ者なきに至りたりとは天晴なる

「バルドン」將軍なる哉

### ○大山將軍の行爲

大山將軍資性敦厚、度量寛裕曾て某會社長將軍の歡心を買はんと欲し眞綿若干を贈る將軍之を一條の繩を付し應接所の天井に吊し以て客を待つ來訪者一見笑はざるなし

曾て宴席に於て故森有禮氏、黒田清隆氏と事を論じて互ひに激昂し黒田氏遂に腕力を以て森氏を挫く衆驚いて之を止むれども聽かず滿堂呆然多くは黒田氏の猛威に恐れて之を制する者なし君徐かに起て之を制し森氏を扶けて遁れ去らしめ自ら黒田氏の腕を扼し之を伴ふて馬車に乗り其邸に赴かんとす車中黒田氏餘憤未だ止まず然れども將軍健腕之を制して動かさず黒田氏曰く妄りに人の腕を扼す卑怯な

り宜しく之を緩ふせよ敢て眞劍を以て見へんと將軍笑ふて曰く車中  
 狹隘眞劍の勝負を行ふ可らず請ふ君の邸に於てせんと馬車黒田氏の  
 邸に至れば酔氣漸く去り氏叩頭以て謝す將軍亦啞然大笑して問ふ所  
 なかりしと云ふ

### ○戲言戒言なる

ウヰリヤム四世海陸の軍人を召集して之に宴を賜ひしことあり玉盃  
 數十行、美酒の空壇卓邊に整列するに至る王顧みて戯れて曰く「誰  
 れか此等の水兵を撤回せしめよ」蓋し其玻璃の色水兵の服色に似た  
 るを以て云へるなり宴に陪せる海軍の佐官之を聞き恐懼しながら起  
 て曰く「陛下聰明、空壇を以て我等海軍々人を戒め玉ふ臣等恐懼に  
 堪ぬず」と王固より其意あるにあらす然れば此言を得て大に驚き由

なき戲言を以て彼が心を傷しめたりと不憚に思ひたるが何げなき体  
 に「左りとよ」と答へつゝ笑を含み「其の既に一度職務を盡し今や將  
 に再び之に就かんとする何ぞ其の朕が水兵に相似たる否か」と

### ○負傷肺病を癒す

英佛戦争の際ウエルリントンの傳令官たりし尉官エル其肺を患ひて  
 日に益々不良なりしが多事の折柄退隱するを快しとせず其儘過し居  
 りしに遂にナポレオンもエルバに流され事茲に一段落を告げたるよ  
 り即ち赴て轉地養療することよなれり然れども幾ばくもなくナポ  
 レオン再び巴里に入る事を聞き今は又其閑地に安臥するの時にあら  
 ざるを知り醫士に問ふて曰く「我が病遂に癒へざるは我れ之を知る  
 唯意を用ひなば我命は幾ばくの時日を待ち得べきや」と醫士氣の毒

げに「精養數月ならんか」と勇猛の軍人之を聞き「僅々數月、然らば座敷にて死せんよりも寧ろ病を冒して勇ましく戰場に死するに如す」と再び元の聯隊に投じウオータールーに戦て負傷す然れども幸なる哉其負傷の爲めに肺の患部を除去し得て彼れ竟に數年の命を保ちしと云ふ

○沐浴して戦に臨む

太平山激戦の時、第二聯隊松永對馬守（氏曾て對馬に島司たり故に此稱あり）戦に臨む前、一日其下卒に湯を沸させ冷風肅殺の間之に浴すること多時、頭より足に至るまで一々石鹼を以て之を洗ひ洗掃頗る力む後ち人に語て曰く明日は余が征清軍に従ふの初陣なり若し明日の戦にして利あらずば生きて何の面目か僚属諸友に見へて且つ

戦争を説ん寧ろ屍を原野に曝して一死自ら専職に殉するの快なるに若かず死して後塵垢皮膚に滿ち頭髮汚れ手足潔からずば恥を海外に晒すものにして武人の木懐にあらず故に洗掃して污垢を去り死して後に恥なからんことを期す生きて醜虜を夷げて聖明に報ゆる能はずば死其れ男兒の分にあらずやと

○比志嶋將軍の勇敢

明治七年今の西郷大將が臺灣を征するや比志島將軍は陸軍大尉を以て従軍し厦門其他の戦に奇効を奏し帝國の軍威を海外に示したるもの實に將軍其人なり尋で北京公使附武官として柳原公使の幕僚となり計畫する所あり故大久保氏全權辯理大臣として清國に赴くや朝夕建策する所少なからず而して其清政府の緩漫を憤り突然天津に入り

李鴻章に直談し彼をして其機敏に震懾せしめたるもの實に將軍の建策に出づ

將軍の天津に入るや一日譯官を伴ひ太沽の砲臺に到り之を觀覽せんとし門衛に賄ふて漸やく入ることを得たり然れども巨細の調査には營内を熟知するものをして案内せしめざる可らず是に於てか士官に示すに銀貨を以てす彼れ黃白を見て忽ち眼眩み全營内を案内し要處に至ることに誇り顔に説明の勞を取れり將軍之に依て營内を詳悉するを得歸りて人に語て曰く太沽の砲臺は世界の要害なりと云ふも余をして之を攻めしめば一瞬時に陷落せしむるを得んと

○三人の兵士從容こして死に就く

紀元九百年の頃カルマシアの勇將アプテール反す偵察兵五百を以

てチグリス河を渡り竊に首都バグダッドを襲はんとす太守モクタダ一俄に各處の橋梁を撤して來攻に備へ警戒最も嚴なり其一部將アプテールと親交ある者なり説て其兵を卻かしめんと欲し單身往て敵將に見ゐて曰く「太守兵を擁すること無虜三千人日暮るゝを待て親ら足下を迎へ撃たんとす足下勇なりと雖も衆寡固より敵す可らざるを恐る若す速に兵を引て去らんには余深く足下の知遇を辱ふす聊か微衷を具して之に酬はんと欲するのみ」とアプテール答て曰く「太守の兵三千一人能く從容死に就くこと我兵の如きものある乎」と即ち其兵三人を呼出し命じて曰く「某は劍を以て胸を貫き斃れよ某はチグリス河に投じて溺れよ某は斷崖を飛び下りて死せよと三人毫も躊躇せず從容として直ちに命の如くす部將悚然として寒心すアプ